やまさき文化

'91-2＊No.10

山崎町文化連盟

やまさき文化第十号発刊に際して

山崎町文化連盟会長　壺阪　壽

〝やまさき文化〟を創刊してより、第十号を刊行するようになりました。十号ということは、丁度節目に当たることになりますし、また我々この小冊子に関係ある者から見ますと、やっと十号まで続けられたなあといった感じです。

このように、続けられたのも、この編集に色々と努力して下さる編集委員の方々や、色々な方面にわたって文化活動をしておられる方々の御投稿があればこそ続けられたのだと思います。

今、私の手元にあります第一号からの各号を見てみますと、毎号毎号随分と編集に苦労されたのではないかと思われますと同時に、号を経る毎にその内容が、豊富になってきています。

この小冊子を見れば、山崎の皆様の文化活動の様子、あるいはそのレベル等が分かるような内容になっています。特に最近のように中央文化ばかりでなく、地域文化の高揚が声高に叫ばれ、それぞれの地域にあってもそういった住民の方々の声に答えるべく、その地域の自主的な文化活動が展開されている時代にあっては、その活動を発表する方法として、どうしてもこのような冊子を編集刊行することが必要であります。

どうか〝やまさき文化〟がさらに刊を重ねて続いていくことを念願いたしますと共に、この冊子が山崎の皆様方のさらに一層の文化活動を刺激して、この町の各方面の文化レベルが高まり、かつ、また、その活動の一段と活発になります一助ともなれば幸いであります。

時代の大きな変化と共に、住民の皆様方の文化活動の分野も、さらに多方面に広がっていくと考えられます。しかし、そのことは住民の暮らしの内容が、豊かになることであります。これからもさらに〝やまさき文化〟がそういった住民の方々の要求に答えられる内容になってまいりますことを念願いたしまして第十号発刊の辞といたします。

◇目　次◇

やまさき文化第十号発刊に際して　壺阪　壽　2
港の見えるビラで　林　沙鷗　3
インドからの手紙　安井　道夫　9
帰って来た今浦島　長川　太郎　12
電話一〇〇年とコミュニケーション文化　岡本　巨弘　14
入選作品・ソナタ「雪」　屋敷　豊子　15
90年ウォークラリー大会で俳句を作る　教育委員会　16
入選作品・にじみ合う心　藤原　誠　17
会話力　本條　衛　18
第12回春の芸能祭ご案内　事務局　18
短歌　藤村　省三　19
俳句　下村　君子　21
地域のためのお手伝いを念願　前野　耕二　22
まぼろしのホタルヒメボタル　河本　雅視　22
磐座（いわくら）　久保　寅夫　23
「やまさき文化」発刊十周年記念に際して　福山　清一　23
過った自然保護論　小川　登　24
サッキ雑感　長田　一三　24
音楽の効用　藤井　七代　25
随処に主となる　柴山　宗玉　25
思い出　葭谷　驍　26
心を忘れずに　藤井　久子　26
美術展から　田中　武　27
なによりも舞踊が好き　杉谷　茂子　27
民踊と健康管理　吉田　芳子　28
将棋文化と世界の中の日本　杉元　正輝　28
歴史ある碁　森本　一二　29
編集後記　荒木　俊介　30
表紙画／カット／　横野婦美子
表紙題字／　尾崎　正一

港の見えるビラで

山崎文学会
林　沙鷗

どの業界でもそうだが、私達の業界にも、ご多分にもれず、中小企業主で組織された団体がある。経営上に於ける様々な情報の交換が主な目的なのだが、年に一回研修を兼ねた親睦会がある。世話は、持ち回りになっていて、その年々によって、開催地で幹事が指名され、その役になった者は、マンネリ化を防ぐため、色々と、工夫を凝らす。

その年の開催場所は、幹事の肝煎りで、ホテルではありふれている、というので一般には余り借さないビラが用意された。明治の頃のさる財閥のもので、山の麓より、やゝ上にあがった辺りにあって、金にあかして作られた宏大な庭園に囲まれていた。持主は、時代の変転と共に、転々と変わったようだが、何よりも自慢なのは夜になると、素晴らしい港の夜景が見られることだった。

研修会の内容も、さる大学の心理学の教授をよんで「人間理解の技術と方法」という人を使う立場にある事業主にとっては、時宜を得たものだと好評であった。この会合には私は、止むを得ぬ事情のない限り、極力、出席することにしていた。それには他にも理由があった。というのは、この会合では、Y県に住む松尾という大学時代の親友に会える楽しみがあったからである。

彼は、有能な実業家であると同時に、温厚で親しみ易い人柄が、私は、好きであった。その上、近隣の同業者となると、情報を出ししぶる傾向があるが、Y県のように遠く離れていると、そういう気兼ねはない。その年は、どちらかの都合で会うのは二年ぶりのことであった。予め、同室にと頼んでおいて、夜の懇親会も早めに切り上げ、二人揃って部屋に引き上げた時は、暮れるには、尚、早い晩夏の薄明りが、僅かに窓外に残っている頃であった。

窓際の椅子に向い合って、腰を下ろし、更めて、互に久闊を述べ、健康を祝し合ってから、例によって、その日の講師の話の内容から業界の景気のなり行きや、互の会社の在り方など、いろいろと、話は、はずんだ。ところが、その日に限って、講師の話の内容について意見を述べ合っている中に、人間の人格形成に於いて、幼い頃の家庭環境、特に母親の存在が非常に大切である、ということに及んだ頃から、松尾の口数が次第に少なくなって行くのに気がついた。

私は、はじめ、その理由が、その話に原因しているということに気がつかなかった。話に夢中になっているうちに、この椅子に腰を下ろした頃の薄暮は、すっかり消えて、漆黒の窓の下にこのビラが自慢だという港の夜景が浮んでいた。

そこには、私達が今迄話し合っていたものとは違った別の世界が広がっていた。時折り聞えて来る汽笛は、旅情を誘うかのように港に響いていた。このビラが自慢にしている光景であった。

松尾は、きっと、この光景に心を奪われているのだ、と思った。

「美しい光景だな。ありきたりの街の灯りじゃないね。こゝには港特有の人と人との出合いと別れといった叙情があるのかな」

私は、こゝのところは、ひとまず話題を変えた方が、よいと思って、松尾の同意を求めるようにいった。

「うん、確かに。唯の街の灯りじゃない。君の言う通りかも知れん。つまり、人と人との出合いと別れの詩があるというわけだな」

しかし、松尾の目は、うつろに港の光景に注がれたまゝで、その口調は、独り言のように聞えた。不審に思って、視線を松尾の横顔に向けた。すると、それに気付いたのか

「人と人との出会いと別れか」

と呟いて、自分にかえった。

「いや、失敬、失敬、俺、実のところ、あの光景を見ながら、講師の話の母と子の関わりについ話している中に、急に、この春先まで、うちの会社で面倒を見ていた少年とその母親のことを思い出してね」

私の推測は、全くとまではいかないが、間違っていたのである。しかし、その松尾の心の中に蘇ってきたという話に私は、興味を覚えた。

「その母子が、どうかしたのか」

「母親は、癌で亡くなった。二月の寒い夜だったな。それで少年の方は、うちの会社を辞めて、大阪の伯母の家へ行って、新しく出直した。僅か一年ばかりの間の出来

事だったがね」
「出来事って、どういう事だ」
「うん、まあ、いろいろとあってね。少年といっても、当時、確か十七になっていたと思う。もう、立派な若者だ」
「父親は、どうなっていたんだ」
「少年が、中学一年の時に死んだ。それも飲屋の愛人の家でね。夫婦仲は、ずーっと以前から良くなかったらしい」
心をゆるせる親友というものは有難いもので、私の繰り出す質問に心おきなく答えていってくれた。

その母子の名は、母親が石崎あや、少年の方は勉といった。
その石崎勉が、どうして松尾の会社に勤めるようになったか、というと、土地の警察署の防犯協会の会合の日に会議を終えて帰ろうとしかけた松尾に日頃気安くしている保安課の橋岡という警部が、ちょっと、頼み事があるので、課まで寄ってくれないか、ということから話は始った。そこで、その足で橋岡警部と一諸に保安課に行った。保安課とは、非行少年などを補導しているところである。
頼みというのは、今度の暴走族の一斉検挙の中の一人で、名を石崎勉という少年を松尾の会社で使ってみてやってくれないか、ということであった。年は十七才という。
「この年頃で、仕事もなしにぶらぶらしちょることが、第一、いかんことですわい」
橋岡警部という人は、自分が鹿児島出身であることを絶えず自慢にしていて、言葉使いにも地元の方言の合間に未だに鹿児島弁が飛び出して、一向にかまわない性分なのである。背は高くはないが、署内でも有数の柔道の猛者だと聞いている反面、気の優しいところのあるのが松尾の気に入っていた。松尾は、外ならぬ橋岡警部の頼みというので、不安は、あったが、一応引き受けることにした。
「そうですか。それは有難い。いやぁ、ここんところ、ずーっと気になっちょりましたが、これで、ひとまずは肩の荷がおりましたわい」
と、いってから、引き受けてもらう以上は、或る程度家庭の状況とか、本人の経歴を話しておきますが、決して偏見はもたないようにしてくれ、又、自分が、こうして頼むのは、本人は、頭もよい方だし、第一母親がしっかりしている。指導の仕方によっては、立派に更生出来る若者だと思うから頼むのだと前置きしてから話し始めた。

勉の両親の仲がうまくいかなくなりかけたのは、勉が、小学校三年頃からで、原因は父親の賭け事好きからであった。腕のよい左官職人で、親方の世話で結婚した頃は、しっかり者の嫁をもらったと、仕事仲間からは羨ましがられた。ところが、それが、却って重荷になったようである。夫の賭け事好きが嵩ずるにつれて、仕事を休む日が、次第に多くなり、妻のあやも黙っておれなくなりだした。あやの小言が多くなるにつれて夫も反発するというようになり、酒気を帯びた時は、暴力をふるった。この頃から、あやが、実家に帰ったり、夫が、女に金を使って外泊する、といった日が多くなり、家庭の崩壊が始まる。父親の収入は、賭け事や遊びに回り、たまに帰って来ると、働きに出だした妻の収入を強要したり、借りた高利のローンの返済の肩替わりをさせられることもあった。
小遣に事欠く勉少年には、この家庭の状況が、どのように映ったことか
「石崎少年が、中学に入学した頃が、丁度、その頃で、わたしが、この署に赴任した年でした。赴任して、一ヵ月もたたん頃じゃった。中学校に集団万引事件が起きましてな。学校の先生方に来てもらったりして、相談の結果、説諭ですますことにしましたが、その中にあの子がいましたんじゃ。まだ、この位の背の」
と、手で高さを示しながら
「可愛い感じの子でしたよ。こんな子が、どうして万引なんかするのかと不思議に思った程でしたわな」
家庭の荒廃が、少年の心境の不安定を呼び、素行が荒れて行く状態が、よく分かった。
「その頃、お母さんにも一、二度会いましたがな、心配事と世帯やつれで、げっそり痩せっちもうて、見るのも気の毒な程でしたわい」
「そりゃそうでしょう。めぐり合わせが悪いんですね」
「そう、そうなんですよ。わたしゃ、この職業について、かれこれ、二十年になりますが、署に出入りする人を見ていると、全く、警官なんて因果な職業だと思いますよ。いやいや、警官なんて徒らに人を検挙したり、罰したりするだけが能じゃなく、もっと更生にも気を配らなきゃとね」
「仰る通りですね」
「話は石崎のことに戻りますがな。その後の学校での素行は、相当荒れたらしく、同級生の間でもかなり名を売っていたらしいですよ。ところが、妙な事に、二年に進

級した頃から少年の素行がおさまりかけたんです。そこで担任の先生が、お母さんに事情を聞かれたところ、どうやら、不幸な出来事ではあるが、父親が乱れた不摂生な生活の末、亡くなり、家庭内がすっきりしたためなんらしいですよ」

頷ける話で、その後も石崎少年は順調に情緒安定を続け、もう、安心と思っていたところ、担任の教師は、母親から、妙な相談を受けた。夜中に母親の寝床に入って来るのだが、どうしたらよいか思案に余っている、というのである。考えてみたこともない相談に、たまたま出会った橋岡警部に担任教師は尋ねた。

「これはね、松尾さん、学者の間では、「退行現象」といって、非行少年が更生を辿る過程でよくある話なんですよ。逆にいえば、少年が明らかに更生の道を歩みかけた証拠でもあるわけなんです」

このずんぐりとした体で、鹿児島出身の柔道の猛者という橋岡警部に、こんな知識があるとは想像も出来なかった。

「ほう、つまり、人間の中に隠された本能とでもいうものなんでしょうかね」

「でしょうな。殊に、母と子の間には微妙なものがあるようですな」

「それにしても、よく勉強されてますなあ」

松尾は感心した。

「負けず嫌いですからな。この課に回されてからは、いろんな本を読んで勉強しました。皆んな独学ですよ。で、そうした場合の母親の対処の仕方がむずかしい」

厳しく拒否することは禁物で、理性と節度を以って温かく迎えてやることが肝要であるという。石崎少年の場合も母親は、これにうまく対処して、少年の更生も九分九厘大丈夫と、周囲は、思っていた。

ところが、石崎少年が中学三年の夏休み前頃から再び、様子がおかしくなり始めた。しかし、三年になって担任教師も変わっていたし、事件も起こらぬまゝ無事卒業し、高校に進学した。その後のことは、余りよく分らなかったが、かなり荒れていたようで、物は壊す、喧嘩、長期欠席、と、結局、本人は、高校二年半ばで、退学した。

「どうしてこんなことになってしまったのか、こうした問題のむずかしさをつくづく感じましたわい。まあ、このことについて、世間の人は、母親がある男性と交際をしていたとか、援助を受けていたとか、いろいろといゝますが、それは単なる噂ですから」と、言葉を濁した。

こんどの事で、橋岡警部が、石崎少年の母親と会ったのは、丸四年ぶりで、主人の亡くなった後の残された高利のローンの返済などの苦労話や去年の夏の胃の手術のことなどを聞いて、気の毒になり、他人事とは思えず、こうしてお願いするのだということであった。

そして、その翌々日、警部から一昨日お願いした　職のことを先方の母親に話したところ、母親は、大変喜んで、そんな立派な会社に使ってもらえるならこんな有難いことはない。早速、息子と相談して、どうでも行かすからということで待っていたら昨夜、息子も承知してくれたので、いつお伺いしたらよいか聞いてくれという電話があった。

「と、いう訳で引き受けることにして、ある夜、母子二人を一緒によんだ。母親にも一度会っておこうと思ってね」

「そんな母子が、よく一緒に来たね」

「その通りだよ。失敗だった。母親が傍らに居ることもあって、少年が、殆んど口をきかないんだ」

「成る程、そういう若者の気持は分かるね」

気を使って、母親が、代わって答えるといった状態で、それでも大体の家庭や少年の生活状況は分かった。それで一時間余り話して、二人は帰った。玄関で、別れの挨拶をすませ、背を向けると、少年は、母親にかまわず、一人で歩き始め、その差はみるみる開いていった。あっと、いう間の出来事であった。松尾は、その光景の中に母子の間の埋め難い断絶を見る思いがした。

会社の仕事は、修繕部の現場で、小柄ではあるが、年輩で、比較的人望のある寺本という係長のもとに配した。

「会社での勤めは、うまくいった?」

「その係長の話だと、同僚との付き合いが少しうまくいかない様だが、まだ間もないから、そのうちに馴れてくるでしょう、ということだった」

こうして、暫くの間は、こともなく過ぎたが、十ヵ月程たった頃、一寸としたトラブルが起きた。ある日、橋岡警部から、石崎少年がスピード違反で捕ったが、どうしても、免許証を見せないといって若い警官が、公務執行妨害だと、いきまいて署に連れて来ているので、会ってくれとのこと。署に行くと、橋岡警部が、我々は席を外すからといって出て行った。事情を聞くと、車を止められて、窓を開けたところ、何ん

や、又、お前か、と見下げたようにいわれて、カーッとなったという
「警官も若いだけに、一寸、口が滑ったようだな」
「それもあるが、あとで、警部が少し鬱積したものがあるんじゃないだろうかなと心配していた。態度から何んとなく分かるんだな」
「永年の経験からくる勘というやつだな」
「そういうことらしい。警部も予言したわけじゃない。心配しただけなんだが、その予感が、二ヵ月後に起きた」
「どういう事件なんだ」
「いや、それより先に、このスピード事件の翌日から少年が会社に出て来なくなったので、二日目に様子を見に行って、母親が病床に伏していることを知った。肝心の少年は、居ないし、どうも、こんどの事は知っていないらしい。そこで、悪いという噂を聞いて見舞に来たと、いゝ繕った」
「と、思っていただけじゃないのか」
「そのようだったね。母親は、あの子は、まだ、まともではない。目を見たら分かると、心配気な顔なんだな」
「警部と同じような心配をしているんだな」
「向うは職業的だが、こちらは、本能的な母親の勘というのだろう。それから、母親は、あの子が、まともにならぬうちは死ぬにも死ねぬと涙を浮べていた」
「それが、ほんとの母親の気持だろうな」
私も、その言葉には、じーんと目頭が熱くなるのを覚えた。
帰り際に、看病に来ている母親の妹という人が、姉は癌で、医師はあと二、三ヵ月の命といっているという。
石崎少年は、その翌日から出勤しだしたので、松尾は、ひとまず安心したが、今度は母親の病状の方が気がかりだった。
こうして、二ヵ月程たった頃、事件が起きた。不幸なことに橋岡警部の予感は、当っていた。
その日、昼前頃に警部から石崎らが厄介な暴力事件を起したので、署まで来てもらいたいとの連絡を受けて、松尾は、急いで駆けつけた。事件は昨夜の出来事で、石崎ら仲間三人が相手方の被害者である二人の若者を公園に呼び出して、暴力を振っているところを警邏中の警官に逮捕され、取り調べの後、留置している。若し、警官に見つかっていなければ、傷はもっと大きかったのでは、ということであった。
橋岡警部の目は、血走っていた。松尾の顔を見ると、就職を頼んだばかりに、飛んだ迷惑をかけた、と侘びてから
「わたしは、あの子を見損っていましたよ。あんな血も涙もない奴だとは思わなかった。母親が生きるか死ぬかの瀬戸際だというに」
と、嘆いた。
動機については、石崎少年の親しくしているS少年と被害者である二人の若者との間の女をめぐるトラブルが原因で、石崎少年は助人的な存在だが、暴力については、指導的な立場にあったらしい。双方の言い分に、まだ不明確な点があるので、更に、もう一日留置するということであった。
「起訴のことは、どうなります」
と、警部に尋ねると、
「過去のこともあるし、免がれないだろうが、ただ、こうした場合被害者から事を穏便にすませてほしいとの願いが出るんでね。本人達の将来を考えた時、この際、けじめをつけるべきか、どうか、我々としても、悩むところですわ」
と、日頃の警部に似合わず、しおれていた。
しかし、結局は、その翌日、相手方から嘆願書が出て、協議の結果書類送検は、とり止めとし、釈放と決った。身柄の引き受けは、本人と叔母との折り合いが悪いというので、松尾が引き受けた。叔母の電話によれば、母親の病状は重態なので、事件が分からぬようにしてくれとのことなので、松尾は、その日は家の前まで送り届け、その翌日の夕方見舞を兼ねて、様子を見に行った。
「少年は、いた？」
私は、気になって尋ねた。
「いなかった。疲れのためか、昼前に起き、朝昼兼用の食事をして、出て行ったきりなんだ。叔母は、あの子は、私がいつも説教をして、うるさいから、毛嫌いするんです、とこぼしていた。母親の方は、一目見て、もう、これは長くないなあと分かる程衰弱していて、叔母という人も大変だと思った」
「それにしても、石崎少年は、暢気どころじゃないね。橋岡警部じゃないけど、血も涙もない奴といいたくなるね」
「母親の方は、勉少年が顔に傷をしていたから、何かあったことに気づいて、手を

合わさんばかりにして宜しく頼むといって、あの子があんなになったのは自分に責任がある。主人の亡くなった後、私がたった一度……といゝかけた時、傍らから妹の叔母が、もう、そんなに喋べったら、体に障るといって止めた」

「つまり、話を総合すると、母親にしてみれば、主人の亡くなった後、ある男性と交際をして、援助を受け、それが原因で少年が、再び非行に走った、ということを君の前に告白して、せめても、息子への償いにしよう、とした訳だ」

「まあ、そういった推測が間違いのないところだろうな。母親は、もう、これが最後だと思ったのだろう」

こゝまで来た時、私は、松尾が少しばかり興奮していると思って、一息入れることにした。

「どうだ、ビールでも飲むか」

松尾が頷くのを見て、冷蔵庫からビールを取り出すと、栓を抜いて、二つのコップに注いだ。その間、松尾の目は、じーと、窓外の港の光景に注がれていた。しかし、心は、恐らく、母子のことに傾いていたに違いない。私は、一つのコップを松尾にすゝめ、もう一つのコップをとって、一気に飲み干した。美味しい筈のビールのほろ苦さが胸をしめつけた。

母子のそれから先が気掛りな私は、松尾がビールを飲み終るのを待って、話を進めるように捉した。

「その翌日からは、二日間の出張の予定があったので、母親の病状を気にしながら出かけたんだ。ところが帰って見ると、母親が昨日死んで今日が通夜だと家内がいうんだ。驚いたね。まさか、こんなに早くとは思わなかった」

そのあと、松尾は、私が口をさし挟む余地がない程、憑かれたように一気に話し始めた。

その夜、松尾は、通夜に出かけた。弔問受けの席に俯向き気味の少年の姿を見た時は、ほっとした。あとは少年が母親の死を看とれたか、どうかであった。通夜の行事が終って、弔問客が殆んど帰った頃を見計って、叔母を呼んでもらった。ほんの身内の者だけになった部屋の片隅で、悔みを述べた後、叔母は、臨終の際の模様を話してくれた。松尾が訪れた翌日、往診に来た医者は、帰り際に、あと二、三日の命だから、会わすべき人は、呼んでおきなさいと告げて帰った。慌てゝ、叔母達は前日から居な

い勉を探したが、結局、友達と車で遠方にでかけたということは、分かったが、行き先が分からない。漸く、連絡がついて帰って来た時は母親は、既に亡くなっていた。最後まで、勉のことを心配しながら死んでいった、と叔母は、声をつまらせた。

冬の冷たい雨の中の葬儀であった。遠くから見る勉少年の顔は、さすが、打ちしほれていた。それから二日後、少年から電話が、かゝって来た。相談したい事があるので、これから、そちらへ行ってもよいか、という。何の相談だろうと待っていると、夜七時頃、尋ねて来た。葬儀の礼なら分かるが、改まって相談となると、何のことだろうと思って、応接間に通すと、

「専務さん、実は、葬式の後、親戚の叔母らと相談して、これを機会に大阪の伯母のところへ行くことにしました」

といって下を向いた。いつもの投げ遣りな口調は消えて、しおらしさがあった

「それは又、どうしてや」松尾は、つとめて、くだけた調子で尋ねた。

「専務さん、今度という今度は、よーお、ど性根が入りました」

と、話し始めた。

明日は愈々納棺をするという前夜、人を拂って叔母が母の枕元に少年を呼んだ、

「さあ、これが見納めや、よーお見とき」といって顔の白布をとった。痩せ衰えた母親の死顔を見た時、初めはどきりとしたが、目が放せなかった。暫らくする中に可愛想やなあという気持が湧いて来た。それから、叔母は、

「あんたは、親の死に目にも会えず、最後まで親不孝やった」

と、いって母親がどれ程少年のことを心配していたか、小さい時からのことを細々と上げて、女一人が生活を立てて行く事が、どんなに苦しいかを話し、それから枕元の二枚重ねた敷布団の間から小さい箱を取り出し、蓋を明けて、中を見せた。

「これ、何んや思う」

幼い頃、母親が一度見せてくれた記憶のある臍の緒だった。叔母は、それと分って

「これをお母はんは、ずーっと、あんたや思うて持っとったんや。いよいよ最後や思うた時、枕元を探して、何かいおうと、するんやけど、もう、声が出へん……」

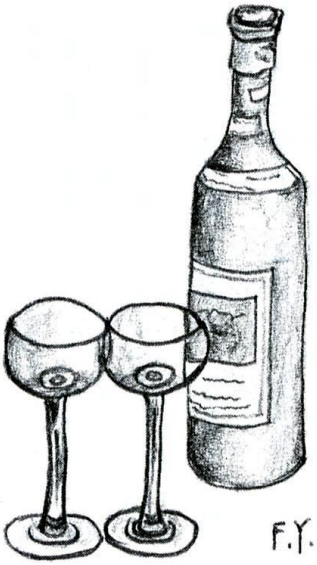
と、いって、絶句したという。

こゝまで話した時、石崎少年は、涙声になっていた。見ると、涙が目から溢れ出て、急いで右手で拭おうとしていた。

「そうか、そうか、君の辛い気持、よーお、分かる。さあ涙拭いて」

血も涙もないと嘆いた橋岡警部の顔が浮んだ。
松尾は、両手を石崎の肩に当てて慰めた。それにしても、どうして、この涙が母親の生きている間に見られなかったのか、皮肉なことに、その死によって、少年が自分の非に気づいたことになる。
それで、葬式の後、叔母達親戚の者と相談の結果、伯母のいる大阪に出て、新しい環境のもとで、再出発することになった、というのである。
「そうか、そりゃ良かった。新しく出直すには、新しい土地の方がええ、
「それに、お母はんの居らんようになったこの町には、もう、未練はあらへん」
「しかし、大阪に出ても苦難の連続だぞ」
「それは覚悟しています。今迄もこんなこっちあかんと思うことは、あるにはあったけど、いつも腰くだけになっていました。けど、今度は違います。でないと、お母はんが、可愛想やと思うようになりました」
そういって少年は、俯いた、とっとっと語る少年の言葉には真実が感じられた。少年は、潜在意識の中で母親を愛していたのである。
「そうか、そう思うか。それを聞いて、今頃、きっと、お母さん喜んでおられるよ」
その言葉を生前のお母さんに聞かせたかった、といいたかったが、こらえた。
「叔母さんからも聞いただろうが、お母さんは、本当に君のことを心配しておられたからな」
「お母はんが、亡くなって、はじめて、なんでもっと早く気がつかなんだのか、ということが分りました」
「君のお母さんのことについて、時々、こんなふうに思うことがあったよ。君が、あの公園裏で暴力事件を起した時、運よく警邏(ケイラ)中の警官に見つかったのも、お母さんの一念が通じたからやとな。若し、見つかってなかったら、あんな生やさしい結果ではすまなんだ筈だよ」
「そういわれれば、そうかもしれません」
「かもしれませんじゃないよ。そうにきまっている。母親の気持ちというものは、そういうものなんだよ。それから、大阪に立つ前に橋岡警部のところへもお別れの挨拶に行くようにな」
「そうします。あの人にもお世話になっておきながら、迷惑をかけました。恐いけど、えゝ人でした」

珍らしく、口数の多くなった石崎少年は、その夜は遅くまで話して、帰って行った。玄関まで見送りに出た松尾に別れの挨拶をすると、薄暗い街路燈の夜道を一人とぼとぼと帰って行った。松尾は、その後姿を見送っているうちに、一年前、母親と二人で訪れて来た時の帰り際の光景を思い出していた。
総てを語り終えた松尾は、突然、うつろな目で私に問いかけてきた。
「その時、その夜道の中に、俺は、何を見たと思う」
「……」
咄嗟のことであったので私は戸惑った。
「幻だよ。少年の後姿を必死に追い掛ける母親の幻だよ」
窓の外は、夜の靄に包まれているのか、港の灯火が潤んだようにきらめいていた。
松尾は、静かに、その港の光景に見入っていた。恐らく、僅か一年ばかりの間ではあったが、彼の人生の一駒を通り過ぎて行った石崎母子との想い出が、走馬燈のように蘇って去らないのであろう。
夜の航海に出るのか、間遠くなった霧笛が港にこだまして、長く尾を引いていた。
私は、気づかれぬように、そっと、椅子を離れた。



インドからの手紙

安井道夫

はや十一月、あなたは起き抜けの肌寒さに驚きあわて、厚手のセーターを取り出したりしているのではないでしょうか。セーターといえば、私たちがデリーに着いたときのこと。空港に出迎えたガイドのRさんが、黒いカーディガンをいかにも寒そうにはおり、「雨期も終わり、やっとインドも冬の季節に入りました」と説明したとき、私はここの堪えられぬほどの酷暑を知っているだけにほっと胸をなぜ下ろしたものです。

ところがです、州面積の半分以上がタールの乾燥、半乾燥の砂漠で占められているラジャスタン州に入ると、まったくの真夏がぶり返してきた暑さで、帽子なしでは街路を歩くのも大変な苦痛という有様です。デリーと緯度のほとんど違わないマンダワの照り返しの強い陽光の中で、夏の気温を尋ねると、摂氏四九度にはなるといっていました。とても、あなたが生活できるような風土ではありません。

それでもこれからの冬の季節なら、どこか一ヵ所に滞在して、タマリンドや、インドセンダンや、あの聖なるインドボダイジュの大きな木陰から木陰を選び、花々と小鳥の群れに囲まれて、嬉嬉として散策するあなたの姿を想像することができますよ。石の垣根には、あの図体の大きなクジャクが二羽、三羽。木々の枝には大小さまざまな小鳥たちの恐れを知らぬさえずりが聞こえ、それはわたしたち日本人には実に不思議に思われるほど天真爛漫そのもので、これこそ仏典の極楽の姿かと意外の感にうたれてしまうのではないでしょうか。

今回の私のインドの第一印象は、樹木の立ち姿が実に堂々としているということで、広大な畑地や原野に点々と植えられた低木にしても、日本でのように群れをなさず、その一本一本に個性があるのです。平原に植えられたものは、マンゴー、バンレイシなどの果樹やラクダの好物でトゲのある灌木ケジャリ、またムユウジュなど種類も多く、用途も多目的に利用されているようで、私は最初アッサム茶園のシャドー・ツリーのような役目を果たしているものとばかり思っておりましたが、あるところで老婆が樹木の中ほどまで登り、しきりに枝を切っています。そうすると、今度は、葉をつけた枝を一つ残らず切り落したごつごつした樹木の影絵のような姿が目にとび込んでき、別の場所ではそんな黒々した枝に一斉に新芽が萌えはじめたものもあります。このように立ち木を枯らすことなく、家畜の糞につぐ重要な燃料にしているのも、また樹木利用の一つの形態なのでしょう。

ラジャスタンでは、王宮から貧しい民家までの建築資材はすべて砂岩か泥で、ここでも牛糞が大切な役割を果たしているとしても、木材の使用はほとんどありません。石材の利用状況については、また別の機会にお話しましょう。

さて、樹木に個性があるように、人間の方も日本人とは違った個性をもって生きているようです。私たちには理解しにくい出来事がいくらでもあります。

車で走りはじめて驚いたのは、大型トラックの事故の多さで、荷物の積み過ぎか車輛の老朽化なのでしょうが、ただ道路をふさぐように横転しているだけのものから、運転席が無惨にえぐりとられたもの、果ては路肩から真っ逆さまにとび込んでいるものまで、それらが荷物を積んだまま放置され、付近にはだれひとりの姿もありません。

私たちが一日のうち見た中で二、三は絶対死亡事故だと話し合ったものですが、ここでは日常のありふれた出来事として気にもとめられないのでしょうか。道路には、居眠り防止用に、ところどころ盛り上がった場所があり、その都度スピードをゆるめなければ危険な構造にはなっているのですが、スピード違反取締などには一切行き合ったことがありません。

ブシュカへの途次でのこと。一台のトラックが私たちのバスを追い抜きざま、バックミラーを引っ掛けそのまま逃走。そのときは道路の混み具合が激しく、しばらく走ってから車を追跡。ようやくチャイハナ（茶店）の前の広場に相手の車を誘導することができました。

私たちの運転手は車を降りるなり、相手の運転席に上がり込み、取っ組み合いの喧嘩がはじまりました。次にはガイドも、助手も入り、付近にいた関係のない野次馬まで輪になって喧々ごうごうの議論、そのうち頭髪を額のうえに束ね、頬からあごにかけて毛むくじゃらのシク教徒の一見親分風の男があらわれてきて、二言、三言話合ったかと思うと、話しの輪はさっと散って運転手も戻ってきました。

ガイドにその結果を聞いてみると、

「相手の運転手は絶対悪くないといい張ります。インドでは自分が悪かったなどいいません」と。

ここでは、こんな秩序で社会が動いているのです。バックミラーは、こちらの費用で新調するしかないでしょう。

さて、シク教については、あなたはあまりご存知ないかも知れませんね。

イスラムの影響のもと、カースト制度や多神教に反対してヒンドゥー教を改革しようとして十五世紀に興った宗教で、一時はパンジャーブ地方にシク王国まで建設しました。もともとはヒンドゥー教の一派だったようです。

一八四六年イギリス軍に敗北した後勢力が衰え、現在信徒総数一、三〇〇万ほどの少数派ですが、肉食のタブーがなく、そのため他のインド人に比べても体格にすぐれ、軍関係や交通関係の仕事で活躍している者が多いようです。

あのインド人の典型と思われているターバンも、頭髪や髭を切ってはならない掟をもつ彼らのシンボルから始まっています。それでも往きの飛行機の中では、交通事故のときの親分さながらターバンを巻かず、ただ頭頂に髪を束ねただけの男たちが数人、落ち着きなく何かの相談か、ひっきりなしに動きまわっている光景を目にしました。シク教徒は、インド人の中ではとくに勤勉で、進取の気性に富むといわれていますので、いささか際立った存在になっているようです。

ところでインドはよく中国と比較されますが、中国のすみずみまでご存知のあなたもその多様さには、ちょっぴり面くらわれるのではないでしょうか。

インド亜大陸と中国本土は、面積、人口とも似たようなもので、中国が円に近い地形の中におさまっているのに対し、インドの方は下向きの三角形。当然、インドの方が地形的にも広範囲にわたり、その変化の多い環境の中にヒンドゥー、イスラム、ジャイナ、シクなど多数の宗教と、三三〇の言語をもつ民族が住みついているというのであれば、私たちには想像を絶する複雑さがインド世界を満たしているとしても何の不思議もないでしょう。

文化を考えるとき、「その含む反対の極の種類が多ければ多いほど、彩り豊かな活気に富んだものとなる」といわれますが、あまりにも整然として、画一的な日本社会に比べ、ここではエネルギーの底力をいやでも感じてしまいます。

住みよいとか、住みにくいとかは次元の違ったもっと相対的な問題ではないでしょうか。

いまインドは、日本の新聞でも報道されていると思いますが、社会的にも政治的にも大きな混乱の中にあります。

一九八〇年代には、パンジャーブのシク教徒のテロ事件から黄金寺院への軍隊の侵入、そして抜き差しならぬ宗教的抗争。アッサムでの自治権拡大要求、国境をこえたカシミール問題など難問ばかりが山積し、それらはすべて人口の八割を超えるヒンドゥー教徒に対するムスリムなど他のマイノリティ（少数派）からの宗教闘争の相貌を色濃くもっているのです。

今回は、それが一段と広域化していって、ほんのわずかな滞在の私たちが経験した事実だけでも、各宗教間の対立の根の深さが手にとるように分かりました。

ニュー・デリーのインド門あたりでは、手に手に朱色の三角旗を掲げた市民の団体が次から次へ、広大なラージ・パット通を国会議事堂へと進んでいます。

もちろん、V・P・シン首相の退陣要求でしょうが、一方各地で焼身自殺が報道された学生たちは、交通量の多い幹線道路を封鎖、私たちはすぐそこにホテルを見ながら遠まわりして帰る一幕もありました。

シン首相は、かねてからの懸案であった低層カースト優遇策を一歩前進、政府・公共機関での雇用率引き上げを勇断したわけですが、政治の世界ではなかなか理屈どおりにゆかないものとみえ、上層カースト出身の学生たちから捨て身の抵抗をうける結果になってしまったのです。

もっと大きな問題は、やはり宗教のからんだ闘争で、警官の発砲事件もあり、各地の犠牲者総数は数百人にのぼっている模様です。

発端は、ラーマ神の生誕地とされる聖地、ウッタル・プラデーシュ州アヨーディヤにあるイスラム・モスクを取毀し、新たにヒンドゥー寺院を建設しようとしたことで、それに責任者としてインド人民党総裁アドバニ逮捕が火に油をそそぐ結果となったようです。

ここでも部外者としては、政権存続のための目先の利権だけを追ったものではなく、複合国家維持の理想を掲げた政治的良心の実行として高く評価したくもなるのですが、現実はまったく別の様相を呈してしまっています。

ガイドのRさんは、ここ二、三日のうちに内閣が交代します。と確信をもっていっております。

私たちがデリーに着いたときから、各地の不穏なニュースは聞いており、ラジャスタン州都ジャイプールでは往きも帰りもピンク・シティといわれる旧市街へは一歩も入ることができず、期待した「風の宮殿」（ハラー・マハル）も、天文台（ジャンタル・マンタル）も、シティ・パレスも見ずじまいです。城内では、ムスリムとヒンドゥー教徒の抗争で二十数名が命を落としたといっていました。

ところが旧市街を取り巻く赤砂岩の城壁の、その外側に開かれた新市街では何の不安な兆候もなく、アンベール城へは象の背中に揺られながらの、のんきな観光をすることができましたし、日暮れの到達になりましたがインド更紗で有名なサンガネールでは捺染の工場見学も楽しむことができました。

ジャイプールに次ぐ州第二の都市ジョドプールでは、もう少し緊張感が伝わってきました。私たちが広大なメフランガル城から、祭司階級（バラモン）のブルーの壁の家々が美しく点在する市街地を見下ろしていたとき、旧市街から人かげがまったく消え失せているのを発見しました。

あれほど雑踏するインドのバザールに人かげがないとは実に異様なことです。

それもそのはず、その日はちょうど午後五時から外出禁止令が出て、あとは警官か軍隊の姿しか見られなくなっていたのです。

私たちの車は、旧市街を避け、遠回りしてウマイド・バーワン・ホテルに帰り着きました。

翌日のバザールはもっと酷く、午前八時から十時までのわずか二時間しか営業できないとのことで、私たちのうち希望者だけリキシャに乗り合わせ、朝食もそこそこに出発したりしました。

社会問題といえばもう一つ。中東湾岸危機の影響で日本などで想像できないほどの燃料不足にみまわれています。イスラム教徒にとってインド最大の聖地といわれるアジメールの街路で、単車に乗った若者たちの延々長蛇の列に行き合いました。

単車はひとの乗ったまま二、三列に、それは街角を曲がって続いており、総勢六、七十人はいたでしょう。

私たちのバスも冷房を切り、行く先々のスタンドで声をかけてみるのですが、そこには必ず道路をふさぐほどのトラックやバスが待機しており、運よく給油してもらっても五十リットル程度で、とても冷房を再開するところまでいきません。

一度入った石油類は、つぎは一週間後にしか入荷しないという話です。

それにしても、なぜ私たちのバスにかぎって、列に割り込んでまで給油してもらえたのか、不思議におもってRさんに聞くと、

「添乗員のYさんが、若いきれいな女性でしょう。それを利用させてもらっているのです。いま、空港まで走っているが、燃料不足で困っている。時間に遅れたら大変、なんとか助けて下さいと、店の親父を拝みたおしているのです」という返事。

この話は真偽不明です。

ただし、私たちがデリーを出てから唯一飛行機を利用している間、夜中のジャイプールでガソリン補給のため五時間かかったと運転手から聞いたとき、やはりそうそう天下の宝刀もないのかと納得したものです。

さて、このお便りも、あなたに少しでもインドらしさをお伝えしようと書きはじめたもので、一、七〇〇キロのバスの走行中、昼も夜も一睡もせず、目をきっと見開き何でも見てやろうと構えてはみるのですが、バスが動き出せば瞬間眠ってしまって外の風景には関心のない他の同行者よりも、はたして私がインドを理解できたかというと自信はまったくありません。

それでは、もっとありふれたお話をしましょう。インドの水の悪さについては、あなたもお聞きになったことがあるでしょう。どんなツアーでもまず最初の注意は、たとえ一流ホテル備え付けの水でも、一切飲んではならないということです。

水といえば、私の最初の海外旅行がアッサムからネパールへ抜ける「ヒマラヤ山麓の旅」で、前もっての説明会の席上でのこと。水筒をもって行くか行かないかで、同行の教授と添乗員とで激しい議論がありました。

まだ未婚の若い添乗員は、最初のインドでカルカッタを見、カルチャー・ショックで食物がのどを通らず、はじめの一週間はオレンジばかり食べていたから皆様も是非水筒だけは持っていって下さいという。ところが教授は、私は未開のドラヴィダ族と何ヵ月か生活を共にし、彼らと同じように水を飲んでいたが、下痢など一遍もしたことがないという話。そのときは、心配な人だけ水筒をもっていくということで落ち着きました。

その後日譚を報告すると、ダージリンで食堂へ顔を見せず、帰りの急な坂道で幾度も幾度も林の中へ姿をかくしていったのは、実はその教授の方だったのです。

ラジャスタンは地図をご覧になればすぐにも納得して頂けると思いますが、ほとんどが半砂漠の地。人口密度も極端に低く、車で走っても白く塩が浮き出たところが見

えます。それがたとえ王宮のようなホテルであって、顔を洗うためにだけ水をくくんだとしても、その塩辛さにすぐ気づいてしまいます。

ジャイサルメールではホテルの紅茶も塩辛く、なんだか硬質な感じがして飲めたものではありません。

そうして、だいたい一週間ぐらいたつと、水あたりで異常をうったえる者が必ず出てきます。それはインド旅行につきまとう特有な下痢で、日本から持ち込んだ薬ではほとんど治りません。

私たちの場合、最初に老夫婦の奥さんの方の食欲がなくなり、顔色もすぐれないと思っている間に、とうとう現地の医者を呼んで診察をしてもらった様子で、薬も当然その医者が付与、明日になったら治りますといって帰っていった由。

それが翌朝食堂で会ってみると、見違えるほどの顔つきに回復しているのに一驚しました。

そのうち私も案の定下痢。医者に来てもらうほどの大げさなこともないと、Rさんに依頼してバザールで薬を買ってもらい一日分飲むと、その夜は腹部がごろごろと鳴り、なにやら胃腸のなかで激しい闘争が行われている風でもありましたが、翌日からはウソのように何事もなし、という状態です。

いま日本でもインドやチベットの医学が見直され、『アーユル・ヴェーダ』の解説書など多数出版されているようですが、インドの風土や水を抜きにしてどれほどの効果があるものか、私は疑問に思っています。

そうして日常の飲み物といえば、街の中、道路沿いなどいたるところにある茶店で飲むチャーイといわれる紅茶に勝るものはありません。最初はコップが汚れているとか、使ったあとの始末が粗雑だとか、洗う水がきたないとかいっていても、日に何杯も飲む間に、そんな気遣いも忘れ、走行中にもういい加減にチャーイの休憩があるのではと期待するようになれば、やっとインドになじんだことになるのでしょう。

ここでどうやら私も、女性の美しいサリーの話や街角の雑踏や貧しい農民の暮らし向き、またプシュカのラクダ市、幼児婚の話など、お話できるはずなのですが、それは次のお便りで致します。

くれぐれもお体大切に。

一九九〇年一一月七日

帰つて来た今浦島

灘神戸生活協同組合
名誉理事　長川太郎

五十二年ぶりに帰郷して、山崎で暮らすようになり一年が過ぎました。

ふりかえって見ると昭和十二年四月、十四才で上神、どんな仕事をするところかもわからないのに「学校」と言う名に惹かれて、神戸消費組合学校に入学したのが、五十二年二ヵ月にわたる、生活協同組合運動者としてのスタートになりました。

現在の灘神戸生協も、その年が創立十六年、組合員数、一四、六二五世帯という、まだ年若い生協でありました。

「一人は万人の為に、万人は一人の為に」という理想を掲げ、一人一人では弱い消費者が、お互いにお金を出し合い（出資金）、相愛扶助、みんなで助け合いながら消費者の暮らしを向上させていく運動が消費組合（当時の呼称）である、と教えこまれたものです。

「暮らしと健康」「新家庭の創造」「家庭経済」「家計簿」等々の言葉が、ごく自然に、日常語として口にされる当時の職場はまことに斬新なものに思えたものです。

さてこのような環境の中では、物価、モノの値段が重視されるのは当然で「取扱品値段表」が毎月発行されていました。

私が入所した四月の値段表を見ていると、当時の物価、当時の日用必需品が、現在のそれとくらべて、まことに興味深く思えるのではないでしょうか。

近来の日本は豊かになったといわれますが、沢山の品目の中から少しだけ拾い出して見ますが、この値段と、現在の価格、そして当時の家計収入と、今日的なそれ、さらに品質や機能の比較などを試みてご覧下さい。

◇

精米（すし米）	十kg	二円七三銭
砂糖（三盆白）	一kg	八七銭
銘柄醤油	二ℓ	五八銭
サラダ油	五五〇g	八五銭

バター（雪印）　二二五g　六五銭
生協牛乳　一八〇cc　六銭
マヨネーズ　四五〇g　四六銭
牛肉（ロース）　三七五g　九〇銭

◇

日用必需品の中にはこんな物が

傘（番　奴）　八〇銭
傘（蛇の目）　一円二〇銭
木炭　火鉢用樫小丸　二〇kg　二円八〇銭
　　カンテキ用　十五kg　一円四〇銭
石炭（無煙炭）　五〇kg　二円十五銭
薪　樫長炭　一束　三五銭
履物（ワラ草履）　一足　四銭
ライオン粉歯磨　徳用袋　十三銭
徳用マッチ（台所用）　一箱　九銭
電球　ガス入艶消し　六〇W　二〇銭

私の入所当時の月給は八円、寮費と食費を六円払うと、手取りは二円、日雇い労働者の日給が八〇銭から一円二〇銭、と教えられていましたが、値段表には紳士靴（キッド）十一円五〇銭、婦人沓、八円五〇銭なども掲載されています。

また「木製冷蔵庫」一号型（最大の型）四十五円とありますが、当時、小学校の先生の一ヵ月の給料に匹敵していたのではないかと思います。

申し上げるまでもなく、電気冷蔵庫はごく簡単に氷をつくりますが、木製の方は、氷の塊で庫内を冷すだけのもの、この氷の値段が非常に高価なもので今日の電気代との比ではありません。

◇

帰郷一年、毎日の畑仕事の合い間に、昔懐しい上寺、庄能の田んぼを見おろしていると、半世紀という時の流れをしみじみと感じるものです。

牛や馬の姿はなくなって、カラフルな農耕機械の活躍に、馬車や荷車にとって変わって軽やかに行き交う自動車に、筒袖の着物に藁草履で通学していた子供達は、揃いのスポーツウェアーに身を包み、ハナも出さず、可愛い顔を赤くしながら学校へ行く、スマートな子供達に変わってしまっております。

十一月三日に催された、山崎祭りの盛沢山なイベントの中にも、半世紀という時の長さを凌駕する、文化の高まりを見ることが出来ました。老いも若きもそれなりに、お互いに手をとり合って精進されている姿が、まことに尊いものに思えたものです。

町から少し離れたところの田んぼに、一体の案山子（かかし）が立っていました。酒落れた男物のジーンズのズボンに運動靴、長袖のシャツは胸のところにワンポイント、キチンと軍手をはいて頭にはゴルフ帽をかぶっています。神戸北野の異人街に立っていても似合うモダンな、かかし君でした。

ボロ切れ、つぎはぎ、ワラと竹、見るも哀れな昔の案山子とくらべて、今日の日本、そして我がふる里の今昔を憶う今日この頃です。

電話一〇〇年とコミュニケーション文化

NTT播磨山崎営業所長　岡本亘弘

明治二三年は〝電話元年〟。この年、東京と横浜の間で開通したのが日本の電話の始まりである。幾多のコミュニケーションと文化を重ねて一〇〇年の節目を迎えている。

創業の頃は、東京一五五、横浜四二加入と文明開化を謳歌する活力ある時代にしては予想を下廻る人気であったようである。

当時発行されたはじめての電話帳「電話加入者人名表」によると、電話番号一番は東京府庁であり、個人では、渋沢栄一、大倉喜八郎、岩崎弥太郎、後藤象二郎、前島密、といったさながら明治の伸士録の趣がある。しかし世間一般は電話に関する認識も未開の状態であったから一向に評判は盛り上がらず、その使用料も年額四十円と当時の商家で奉公する小僧さんの一年分の給金に相当したという。一方、電話がどんどん普及すると小僧さんが失業する。これは重大な社会問題だというので、三井財閥の中心人物であった益田孝氏に局長が意見を聞きに行ったりもしている。今日では全国五、〇〇〇万の加入数をみているが当時としては予想もつかない事情があったようである。

大正の時代は電話にとって一つの革命期ともいえる。電話の利用は交換手による手動交換方式が昭和五四年、全国全ての電話が自動化されるまで続いたのであるが、その自動化への引金は、大正十二年の関東大震災により首都圏の電信電話が壊滅状態となり全くゼロから出発するこの時から自動化に踏み切り、三年後の大正十五年に東京の京橋で最初の自動交換が開始されている。まさに禍いを福に転じた自動化革命といえる。

昭和は終戦を隔して大衆化の時代である。公衆電話の代名詞ともなった赤電話は当初は普通の黒電話機を店頭使用したのであるが目立たないうえに個人所有と思われて昭和二八年に赤色に衣変えしている。この時代には黒電話の上に赤ペンキを塗ったというからまさにアイディア物である。戦後、紙幣による公衆電話もあったが昭和二七年頃から十円硬貨が流通しはじめて翌年の一月には青いボックス公衆電話が、又おなじみの赤ダルマ型の一号機は昭和二九年に設置されている。その後、キャッシュレス時代を迎えた昭和五九年にカード式公衆電話が誕生している。現在全国五十万台に及ぶ公衆電話の約六割はこのカード式であり、山崎においても同様である。

大阪、神戸両市内及び両市間の電話が開通したのは明治二六年のことであるが、こゝでご当地山崎の電話事情についてみると、開通は明治四一年でその数は二五加入である。時代の経過はあっても、大阪、神戸が合せて二一五加入のスタートに較べ相当な数といえる。山崎町史によると明治四三年には郡是製糸工場ができている。この時代の活力ある地域の動きが伺われるのである。山崎の電話が自動化されたのは昭和四三年で全国自動化の十年前からである。昭和六一年には宍粟郡内の市外局番の統一、翌年には国道二九号線沿いの波賀町鹿伏局に宇宙衛星さくら二号と地上局を結ぶ災害時の孤立防止用回線の設置が特筆される。又、昭和六三年には、山崎、佐用地域で自動車電話サービスが開始され利便性や安定性と共に一層コミュニケーションの広域化をみせている。平成の今日では、郡内の電話は約一万八千加入に至っている。

電話一〇〇年。今や電話は日本人のコミュニケーションになくてはならない存在となっているが、その時々のコミュニケーション文化として、その歴史をかいま見ることができればと思うのである。

参考文献
『山崎町の歴史』一九八〇年山崎町教育委員会
『電話一〇〇年小史』一九九〇年NTT

応募入選作品

ソナタ「雪」

山彦民報社勤務
上郡町高田台三丁目十二―八
屋敷豊子

第一楽章　白い天使たち

「わあ、雪！」

夕方、雨戸を閉めようと窓を開けた娘が、大きく叫んだ。

「ほんと？」

思わず窓辺にかけよって空を仰ぐ。

冷たい風に乗って、暗闇のかなたから湧いたように小雪たちがやってくる。

雪よ、雪

やっと来てくれた小さな白い天使たち―。

にわかに胸がざわめく。

晩秋から初冬にかけての、雪にまつわる幼い日々の想い出が一度にどっと押し寄せてきて、私は一瞬、言葉を失った。

第二楽章　晩秋のいろ

それはまさに、まっ黄色のじゅうたんそのものだった。

抜けるように青い晩秋の空に、黄の炎を噴きあげて、銀杏の大木は生家の庭の上手にそびえていたが、裸になる時がくると、いさぎよく毎日毎日、庭も池も黄の落ち葉で埋め尽くすのだった。

掃いても掃いても、銀杏の大木は「金色の小さき鳥のかたち」を振り落とした。はらはら、などというものではない。ばっさら、ばっさらと潔く裸になって行くのである。

そのまっ黄色のじゅうたんが好きで、寝転がったり座り込んだりして違う形の葉を一枚ずつ拾い集めるものだから、私の日課の庭掃きは暗くなっても終わらなかった。

あれほどいさぎよかった銀杏の木なのに、頑なに梢にしがみついている葉が残り少なくなり、やがてそれも数えるほどになると、急に葉を散らすのをしぶりだす。

まるで別れを惜しむように、はらり、またはらりと「金色の小さき鳥のかたち」は何回かまわって地上に降りてくる。その姿は優雅且つあでやかで、なるほど、大人の美しい別れはこういうものか、と思わせた。

その頃になると、季節はなだれを打って冬へと向かった。

ひいらぎの小花が、銀杏に混じってあられのように降る。冷たい風が夕暮れどきの庭を音をたてて吹き抜ける。

そんな日々を重ねて、ある日銀杏は、最後の一葉を未練たっぷりに時間をかけて散らした。

銀杏はすっ裸でうす暗い空に震えていた。

すると決まって、どこからか、天使のような小雪たちが、ふうわり、ふうわりと降りてくるのだった。

第三楽章　白い世界

そうして冬がきた。

私の生まれ育った岡山県北の温泉町は、雪国というには程遠かったが、それでも冬は雪に閉ざされた。

雪の降る前日は、冷たい風が音をたてて吹き抜ける。雪おこしだ。日が暮れても風はやまない。

夕食のあと、いろりに燃えさかる炎に顔を照らされて、家族の者は縄をなったり縫い物をしたりした。薪がパチパチとはじける。私と弟は祖父母に昔話をせがむ。

「長いのがええか、短いのがええか」

「面白いのがええか、こわいのがええか」

私たちはその時の気分によって、どれかを選んだ。

それらの話は何度も繰り返し聞いているので、もうすっかり覚えてしまっていたが、すじの展開が分かっているからこその安心感があった。

やがて私たちは、聞いている内にそこで寝入ってしまい、気がつくと、ちゃんと布団の中でまぶしい朝を迎えていた。

昨夜のこがらしはどこへやら、物音一つしない静けさと、雨戸の隙間から洩れ入る、ある予感を与える輝き。

はね起きて玄関の引き戸をガラッと開けると、外は一面の白い世界に生まれ変わっていた。

「わあ！」
息を呑んで立ちつくす私―。

終楽章　白い天使たちの舞い

窓から身をのり出して、私は雪を掌に受けた。仰向いて、顔にも口にも受けた。雪は掌に、唇に、じわっと溶けた。その上にまた、雪が降りてくる。

雪がまつわる幼い日々の想い出も、私の脳裏をかすめては去り、去ってはまたかすめる。この頃、忙しさに押し流されて、どこかへ置き忘れていた優しい心が少し、よみがえる。鈍っていた感性を少し、取り戻す。

今夜はうんと冷えそうだ。

紅茶にブランデーをほんのちょっぴり落として、雨戸は開けたまま、窓越しに小さな白い天使たちの舞うのを眺めていようか。

’90ウォークラリー大会で俳句を作る

昨年十一月十八日実施された’90ウォークラリー大会の中で、山崎町文化連盟と山崎町教育委員会が呼びかけ俳句が子供の手で作られました。約千人が参加した中で五百数十句の投句があり、選句は和田疎人先生ほか山崎俳句協会の皆様にお世話になりました。

山崎町スポーツセンターを発着として最上山公園、八幡神社など約八kmのコースは晩秋を感じるのに十分すぎるほどでありました。もみじが風に揺れ、舞い散る様は子供たちに深い感銘を与え、子どもらしい感受性の高い俳句へと結び付きました。一席から十席まで掲載いたしますのでご高覧下さい。

一席　小春日のわたあめみたい白い雲　戸原小五年　上道　文代

二席　もみじの木きれいにうつった水かがみ　河東小二年　藤井理恵子

三席　もみじのはかぜにゆられておどってる　菅野小二年　大崎としき

四席　もみじの葉みんなお化粧してまっか　河東小五年　小林　みか

五席　おちばさんきれいなおべべあかあおきいろ　河東小一年　中野ひろみ

六席　秋の山真っかな色の着物きる　山崎東中一年　神名かおり

七席　手みたいなかれははまっかもみじのは　山崎小二年　八木まいこ

八席　もみじ山落ち葉ふむ音秋の音　菅野小五年　大崎　英恵

九席　おちばふみいろんなおとがおもしろい　菅野小四年　前田　真里

十席　もみじのはみんなおけしょうしているよ　都多小二年　福山　智子

募集入選作品

にじみ合う心

兵庫医大病院にて
藤原　誠
城下小学校勤務
宍粟郡千種町鷹巣

森鴎外の作品「雁」に登場するお玉の運命を辿りながら、私なりの幸福論を展開してみようかと思いたったが、正直言って、その思いをまとめる心境ではない。今、私は癌患者三名と同室して寝食を共にしているからだ。二名は甲状腺を切り取って顎の下にもう一つ口が開いている。転移再発を恐れつつも、窓の外に目をやり、心を漂わせている。その口を形ばかり隠している薄っぺらなガーゼを外し、血液混じりの痰をバキュームしたり、か痛みもあるだろうが痰が詰まることが気になるらしく、夜中にも数回起きて、カーテンの向うでネフローゼをしたり、声ともならない声で咳をしたりするのを聞く度に生きることへの執念が伝わってきて、神経が震える。もう一人、耳下腺腫瘍が膨らんで首が回らず、早く切り取ってほしいと言いつつ点滴を受けている。声帯を失ったひとと窓辺に寄り、筆談する。「声が出なくても結構幸せですよ、見たり聞いたりできるから。目と耳があったら人生面おもろいで…。」と彼は言う。

私は聴力回復のため入院している。二十五年間聞こえにくくて不自由していた。でも、自ら前向きに生きることで結構幸せだった。色々見て、目から知識を入れようとする一方で、心をつなぐために自ら話しかけようとしてきた。その陰で、自認識はなかったがコミュニケーション障害による対人不安があった。話しかけられて、尋ね返すと嫌な顔をされる。程々に頷いて過ぎると誤解が生まれる。内容が理解できにくいのみならず、方向がわからなく、キョロキョロする羽目に陥る。不意の会話に旨く対応できるかとの不安がつきまとう。悔しいことが多かったけど、コンプレックスなんか、何時か何処かに吹き飛ばそうとする二十年余だった。

人間は馬鹿ほどいいんじゃないかとも思う。あたり構わず前に進むから、僻みがない妬みもない。馬鹿は自分が悔しくてじっとして居られないから、辺りを見回す。手当り次第に知識を吸収し、技能を身につけるから大きくなる。賢い人間はもともと賢いから、上にいたから、誉められて育っているから、自分と他人を比べて上下を見るから、それが判断基準となるから妬みや僻みが生まれる。あげくは意地悪をし、悪口を広め、人の邪魔をする人生をおくる。そんなことにエネルギーを使うから大きくならない。

随想だから、思いつくままに話をすすめる。

以前、ひとびとの間に大切なものは「理解」ということ、ひとにとって大切なものは「教養」だと山崎に住んでいた中国青年が言い残した。教養とは、ひとくちでは言い表わせないけどそんなに難しいものじゃない。色々な知識であり、技能であり、一生かかって極めていくものだと思っていた。しかし、それだけではないと改めなければならなくなっている。「教養ある暮らし」のためには、どんな生き方を正しいとし、どう生きるかが大きな要素と思えてきたからである。

人生どう生きるべきかについて多く言える年齢ではない。しかし、自己を充実させ、こうするべきだとの意志を持ちつつも突っ張らず、ひとの立場を潰さず、じっと見つめて、建設的に生きる方向を取りたい。色に例えるなら、原色の不透明な色を不遠慮に塗りたくり、他色を塗りこめてしまうような生き方ではなく、ある部分から滲みが始まり、じわっと滲み出して、他人が滲みこめる部分があり、滲み合って新しい色が出せる可能性を大切にした生き方をしたいと思う。

自分の外側を滲ませるには、慎みや弁が必要だ。自分を出してしまうことを慎んでこそ滲み出す。慎みなく自分の言動を振り回すと周囲を困らせることになる。それは「罪」だ。慎む心は相手をさらに理解しょうとする心からも生まれる。

より良い人間関係を築こうとする糸口の一つは「理解」ということにありそうだ。ところが、ひとはよく「わかった」とか「知っている」とか言うが、どうもそう言い切れない質で困っている。なぜなら、本当にそうなのか、それが真実の全てなのかという思いがあって、釈然としないからだ。多分それは一部であろうし、隠れた裏、裏の裏があるかも知れない。だから断言しえないし、言うひとに心から迎合する気にもなれない。真実に至らぬままにとやかく言う人間は、誤解、時として罪をばらまいている態である。その辺りに気付くことが上界に移る糸口だろうと思う。教養ある暮らしはどんなものだろうか、年輩の方と話してみたい。

今日もまた窓の外を眺めている同室の患者は、少し小太りで血色が良く、丸顔に愛想のいい目がふたつついている。語彙が多く、的を得た筆談でよく人を笑わす。

福福しい。

会話力

昭和会
本條　衛

最近の大事件は、イラクのクゥエート侵攻であった。陸地続きの防衛体制のもろさを、実証した典型例であった。

それに比べると、我国は、周囲を海に囲まれて、天然の防壁の中にある。国際軍事専門家は、これを「水の壁」と呼ぶ。

元寇や幕末の危機に、この水の壁が、我国を幾度か救ってくれた。我国が単一民族独立国家を維持し得た大因子である。

もし、我国が往古から、米国、カナダ、ソ連、韓国、中国、豪州等の国と、陸地続きで隣接していたとすれば、日本人個個人の彼ら異民族に対する感覚や意識は、現在のそれと、相当変わっていたであろう。

日常生活の必要から、住む地域によって異る外国語二ヵ国語位は、代々多数の日本人が習得したのではなかろうか。

現実を眺めてみよう。

ヨーロッパや中東の国々は、数千年来斯様な経験を積んだ民族から成立しているのである。その中でも、中心的な存在は、近代以降においては、英国、フランスである。第二次大戦後、国連が機能するまで、中東は主として英仏の支配下にあった。この地域では、英語、フランス語、アラビア語を、数百年乃至それ以上話し合って生きてきたわけである。因みに言えば、国連が認める公用語の中で、使用多数国順位は、英語、フランス語、スペイン語についで、アラビア語であり、アラビア語は二十一ヵ国の国語でもある。

我々は原油輸入の七十％を中東に依存している。中東こそは我国の生命線であるが、アラビア語に強い日本人の数は、心細い限りである。これに反し、欧米人では、如上の背景から、当然多くの話し手が随所で活躍している。

言語の疎通があって始めて国際交流も可能となる。友好的国際関係作りも、つまる所、言語交流の蓄積に外ならない。

イラクショックは、種々の教訓を残したが、最初に、人質全員救出に成功したフランスには、イラクに対し、独得のコネとノウハウがあったと謂われている。

今や、我国は世界各国を相手に、外交や貿易を通じ存立し得る国情にある。将来に及び、日本語が世界各地で通用する事は先づ無理であるとすれば、我国国民にとって、外国語の習熟や、会話力の向上が、益々肝要であろう。

次世代にわたり、平和な経済大国を維持し、生活大国を実現する為に、各人が外国語教育に深く思いをいたしたいものである。

第十二回春の芸能祭ご案内

日　時　平成三年四月二十九日（祝）
　　午前十時三十分から
　　午後四時まで
場　所　山崎文化会館
主　催　山崎文化会館・山崎町文化連盟
後　援　神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の成果を、ぜひご観賞くださるよう、ご案内申しあげます。

参加部門
山崎詩舞道連盟
山崎謡曲同好会
山崎郷土芸能保存会
山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ
（芸能祭実行委員会）

短　歌

最上山公園・紅葉山・八幡神社の樹木と短歌

藤　村　省　三

恵比須神社の境内から最上山の経王堂に出で、展望台にのぼる。そこから更に千畳敷に登るか、渓沿いの道を紅葉山までくだる。紅葉山でしばらく寂けさにひたったのち、弁天池に出て堤を通り、八幡神社に詣でる。絵馬殿で休憩し、宮司宅の前の参道を幼稚園に出て帰る。これが私の散歩のコースである。

ときには、千畳敷から尾根伝いに歩いて八幡神社の裏山をくだったり、荒神さんの西の細みちを登ったりすることもあるが、どの道を歩いても四季の変化に富み、趣が深く、森林浴を存分に楽しむことができる。

・さくら（桜）

山崎には、昔は桜の美しい所が多くあった。忠魂碑の周辺（現在の図書館の位置）、小学校の校庭、荒神社の参道、比地が歩危の並木など、花見の人で賑わったものだが今では見る影もなくなった。最上山の桜も次第に少なくなり、僅かに幼稚園や高等学校に残るだけとなった。

そこ此処に群れゐる人ら物いはず静かにゐては照る桜見る　　窪田　空穂

やはらかにわが黒髪も匂ふなり桜さく夜の湯がへりの道　　四賀　光子

毛虫焼くとわが振りかざす油火の煤かかるなり桜若葉に　　鹿児島寿蔵

・さるすべり（百日紅）

夏、経王堂より見る遊園地のさるすべりの花が美しい。白とピンクの二本はもうかなりの老木である。

百日紅のくれなゐの花咲きそめてはや一とせの夏ふかむなり　　斉藤　茂吉

塀越えて街路にのびし百日紅くれなゐの花に塵溜り見ゆ　　結城哀草果

百日紅庭面あまねく花ちりてあしたわが掃きゆふべ母が掃く　　吉植　庄亮

・まつ（松）

展望台のあたりまで来ると松が多くなる。斜面の松は成長して、いつの間にか視界をさえぎるまでになった。

最上山公園にはじめて遊歩道が造られたのは昭和のはじめであった。松の木立を縫って続くなだらかな坂道は足裏に心地よく、当時としては珍しく整ったものであったが、松は松喰虫のために全滅した。いまの松は、その後に植えられたものか、自生したものであるが、漸く成長して昔の面影をとりもどしている。

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり　　正岡　子規

松の葉はみづみづとしてゆゑよしもなく柔かし春日となりて　　佐藤佐太郎

うら佗びて我がゐる昨日けふの日も松は花粉をしきりにこぼす　　中村　憲吉

・くり（栗）

展望台の周辺には栗も多く、秋には地に転っている毬（いが）が目につく。

たまたまにさす日あかるき山の道栗の若木に花下りをり　　松村　英一

落ち敷ける栗の花殻乾びつつ夏寂寞と闌けゆかむとす　　木俣　修

恵林寺の門の長みち二側に栗の並木はおち葉せりけり　　伊藤左千夫

・くぬぎ（櫟）

もみじ山の北半分は櫟林である。私はこの林が好きで、若葉を透すみどりの光や、枯落葉を踏む乾いた音にこの上もない愛着を覚えるのである。

風雪の中をのこりし櫟の葉おのづから落つ春としなれば　　土屋　文明

日のあたる埴山を見れば柔かくひろがりにけり櫟の若葉　　島木　赤彦

曳き入れて栗毛繋げどわかぬまで櫟林はいろづきにけり　　長塚　節

・かえで（楓）

もみじ山の名で呼ばれるこの丘の楓は種類も本数も多く、南斜面から頂上にかけての一帯の若葉の頃と紅葉の美しさは山崎の町民の心のより処となっている。

老楓深きくれなゐ重ねてはほとほと隠す澄む山の空　　窪田　空穂

しづかなる初冬の山を恋ひくれば楓のもみぢ赤くのこれり　　古泉　千樫

夕光ののこる楓の照紅葉木むらの外は霧たちにけり　　岡　麓

・くすのき（楠・樟）

八幡神社の社叢を代表する樹木は楠である。楠風閣東側の並木、幼稚園裏山の木立が特に大きいが、山崎の町内から眺める豊かな緑のもりあがりは町民の心に言いしれぬ安らぎを与えてくれる。

ゆらゆらとわか葉さゆらぐ老樟の梢に照りて月冴えにけり　　松村　英一

立ち迷ふ靄とまじりて谷に満つ楠の若葉の夕ぐれのいろ　　尾上　柴舟

朝はやく吾が見つつゆく樟落葉黄ばめるゆゑに明るかりけり　　佐藤佐太郎

・かし（樫）

楠とならんで八幡神社の樹木を代表するものは樫であろう。境内の到る処に見かけるが、弁天池西側の傾斜、絵馬殿前斉庭玉垣の西側に多く、秋には地面一面にどんぐりを落して子らを喜ばせる。

裸木と見るまでに葉を落したる樫の芽ぶきは何よりも遅し　半田　良平

夏に散る樫の落葉の鮮かさ苔の上のみ掃きのこされて　若山喜志子

窓そとの樫の葉群はそそぎたる今夜（こよひ）の雨にうす明りせり　佐藤佐太郎

・もつこく（木斛）

木斛は八幡神社のご神木である。幹の周りが二メートルもある大木で、兵庫県の天然記念物に指定されている。

雨なくて乾きしらけし庭のすみに木斛の葉のくろきゆふぐれ　川田　順

しぐれする池のみぎはに木斛のつぶら木の実はうすら赤みせり　新村　出

木斛の実の裂けたるにさし入れる十一月の乾ける日かげ　金子　薫園

八幡神社裏山の桧、弁天社の藤、最上山公園のつつじなど他にも取りあげたい樹木は多いが、それらは次の機会に譲ることにする。

各地短歌会入賞入選作品

◇第二回神戸短歌祭

平成二年四月二十九日
神戸市立婦人会館

・兵庫県文化協会賞

国訛に風邪薬買ひし若者がペンキの臭ひ残して帰る　小倉　法子

・入　選

ひそやかに雪ふる町の点景にバスはひとりを降して発てり　森本　萬千子

値の合はず買手なきまま産み月の迫る雌牛が厩に歳越す　中田　博子

パーティの服をパジャマに着替へ来し嫁が厨に明日の米とぐ　森　つな

フィリピンの子等に贈らむブラウスの赤きボタンの緩びを直す　田中　よしの

◇第九回宍粟郡民短歌祭

平成二年八月二十六日
安富町農村センター

・県会議長賞

なほ動く活作りの鯛の生き死に関りのなく宴ざわめく　森本　萬千子

・安富町長賞

売れ残る茄子の苗がトロ箱に伸びなやみつつ実をつけてをり　安東　はつ子

・しそう農協賞

今更に何のほまれぞ軍服の夫の写真の微塵を払ふ　田中　君枝

・宍粟郡歌人連盟賞

夕べには星を抱かむダムの水藍を湛へて黙深くあり　名賀　ときわ

部屋たがへ篭れる夫も聞きてゐむ音さわやかに風鈴の鳴る　野中　勝子

残生をかき立つるものなき日々に庭の梔子静かに匂ふ　小倉　法子

◇ふれあいの祭典ひょうご90

平成二年十月十四日
浜坂町多目的集合施設

・入　選

山深く入り来てひとり鉈ふるふわが手止むればほかに音なく　北　隆治

◇西播磨短歌祭

平成二年十一月十日
新宮町県立西播磨文化会館

・県会議長賞

またしても進む時計に爪立ちて此の世の五分を取戻したり　田中　君枝

・西播磨県民局長賞

無農薬の表示に惹かれ買ひ来たる大根葉っぱの先まで刻む　安東　はつ子

・西文連会長賞

列なりて坂下りゆく生徒らのペタルに長き足を遊ばす　冨和　かず子

・奨励賞

戸の外に追はれて土に坐りゐる猫には猫の言ひ分あらむ　森本　萬千子

信濃なる吾子の下宿の窓近くりんごは実りて匂へる頃か　新田　弘美

洪水に草木流れて石白き中洲は橋に遠くなりたり　栗山　節子

千枚田のここまで及ぶ減反か一画草に覆はれてをり　篠本　久子

・佳　作

移転せむ墓碑丹念に磨きたる夕べ湯舟に手を揉みほぐす　山本　千代

気怠さにをれば隣家の風鈴の吾に届かぬ風を告げをり　名賀　ときわ

天草を磯に干しゐる女らの老も若きも素足の白き　安政　嘉子

指を吸ふ児もゐる園児らの列が保母に守られ信号渡る　山田　百合枝

麦藁帽子青田嵐にあふられて穂肥なす田にいく度も飛ぶ　小林　郁子

『俳句』

相生港吟行

山崎俳句協会青嶺句会
下村君子

四月八日青嶺句会吟行

和田疎人先生を主宰とする会員十七名は昨日からの雨でお天気を心配しながら九時半集合直ちに出発。

途中、出水の川に沿い、車窓には点々と残りの桜や葉桜を眺め、川岸には菜の花の黄色、山々には美しいつつじを見つつ目的の相生荘へと走る。

天気も段々と回復の兆し、車内は和気藹々と話がはずみ賑やか、網干を過ぎ室津港を左に眺め七曲がりの景観を賞でつつ、花吹雪く花のトンネルを通り山へと登る。

相生荘は小高い丘の上にあり眺めは抜群、眼下に広がる瀬戸の海、島々は霞に包まれ沖行く船は動くともなく静かな眺め、風が強く花吹雪とはこんなにも散るものかと思う程落花しきり、何だか哀れささえ感じました。

万葉園の椿園に行く。椿園は荘の地続きの隣に在り、色とりどりの珍らしい椿、落椿あり園には大きな碑があり、フラココの軋む音、長閑な春の景色でした。

それぞれ海を眺め散る花に又椿園に佇ち句想を練るが、花冷えと云うのでしょうか風が強く寒さの為部屋に入り、外の景色を眺めながら句考する。

十一時半昼食、海が近く、刺身、魚も美味しく山海の珍味を味わいつつ楽しい団欒のうちに会食を終え、午後一時締め切りで投句、直ちに選句に入る。

花吹雪子等は鞦韆漕ぎやまず　疎人
碑文読みいる間も落花しきりなる　泊水
椿咲く万葉の岬今日虚子忌　千代
万葉の色して万葉椿咲く　八重
浦静か艀溜りへ春の汐　光子
空の果海の果とも春の海　薫風
泊船の春の潮に眠るごと　駆雲
散る花に尚捨てきれぬ夢ありて　君子
瀬戸の海岩礁しずめ春霞　延子
島影の薄れて瀬戸の花曇　小次郎
吹き溜る花の深さに掌を入るる　寿女
惜別の心乱るる花嵐　千里
花冷に人の賑ふ茶房かな　いし
断崖をくすぐるのみの春の波　光栄
師の胸に紅落椿丘巡る　とみ代
建造の船あり湾の春の風　南嶺
輪になって岬へ駈ける花吹雪　良子

右の句が高得点を得た句です。

隣の部屋が賑かなのと時間の都合で、花吹雪く丘に、又美しい椿に、逝く春を惜しみながら三時帰路につく。

途中茶房の部屋を借り、コーヒーを飲みながら、疎人先生から句の選評をして頂く。楽しかった吟行の一日を終え五時帰着解散す。

山崎俳句協会近詠

青嶺句会

峡昏れぬ火の色をして早雲　芦田八重
押しくらべ泣く子笑う子息白し　秋久光子
熟睡子(うまい)の吐く息白く背にやさし　石野光栄
幼名で呼ばれ故郷(ふるさと)盆踊　大谷延子
踊る手のどれも生活(たつき)を支へる手　高野南嶺
朱唇より吐く息白く玻璃戸拭く　高野薫風
からむもの絡まれるものみな芽吹く　下村君子
長き夜の吾が引く辞書の古りにけり　杉本いし
娘が父に贈るセーターバースデー　田中良子
柿熟れて空の蒼さをきりりとす　友沢恭子
老いぬれば光陰迅し炉を開く　中野秋藻
病む故の愚痴と思いて聞く夜長　永井とみ代
鵙高音生涯孤高を貫ぬきて　原田小次郎
女郎花群れて此処より登山口　原田駆雲
己が身を炎と燃やし曼珠沙華　秦　千里
山城の搦手とかや女郎花　春名寿女
編みかけのセーター残り恋終る　原田百合
決断を促す如く鵙高音　福田泊水
息白し蟹売る人も買う人も　藤家千代
リス飛べる都度雪の舞う宮の森　深川春雄
毛糸編む不揃の目が笑い居る　前野徳子
紅葉見のにわか信心札所寺　村元優子
御手洗の水涸れてをり神の留守　山田東軒
息白く罵る如く魚を糶る　和田疎人

山脈句会

逝く春や思出つづる旅日記　小倉つね
十薬の夜目にも白く群れ咲きて　牡川信子
退職をねぎらう吾子の絹蒲団　田中八重子
お茶断ちを人には告げず新茶摘む　小島やよい
万緑や教会に満つ祝婚歌　田中　恵
何時までも見飽かぬ菖蒲絵に残し　伊藤紫霞
亡母を恋う吾も子の母秋惜しむ　小紫いく
碧空に宝珠煌き梅雨晴間　小畑柏人
句碑を祝ぎ青葉歩道をそぞろ行く　姫野正子
梅雨晴や心弾みて濯ぎもの　山野源子
柿一つ落ちてやぶるる夜半の夢　山田すま
餌箱に柿の落花や犬は留守　高野薫風
田植終え足伸べいやすしまい風呂　尾崎鈴子
十薬の庭に広がり人住まず　木村一子
神無月父黄泉路へと逝ちたもう　いつゑ
息白く客に呼びかけ蟹売女　和田疎人

さわらび句会

お十夜の鐘鳴りやまず古都の夕　薄木満寿恵
姑逝きて部屋閑もれり冬の夜　川崎栄子
焼きかぶら亡母の味とて酒盃あぐ　小林紫生
障子入れし部屋に墨の香ひろがりぬ　庄　昌子
夕映えの尾花川筋華やぎて　壺阪加代子
息白く鳴き継ぐ鵯の何告ぐや　藤井七代
冬ざくら友逆境に潔(いさぎよ)く　本條淑子
石蕗の庭佇てば亡き人偲ばれて　山中正子
雉鳩の見え隠れして花の下　山岸園子
光り濃き一星掲げ大枯野　和田疎人

地域のためのお手伝いを念願

新潮会　前野耕二

歳月の流れの早さを特に感じる齢となって来ました。新潮会に入会させて貰ったのは未だ三十才そこそこ、ほんとうに若輩者でした。それが今では七十の峠を越えました。昭和二十九年でしたか、会の家族旅行で小豆島へ紅葉を見に行きました。

どうにか歩けるようになった息子と六才の娘を連れて山道を歩き随分と困ったことなどつい先日の様に思われますがその子供が四十近くになり、今更ながら時の経過に驚いています。

会の発足当時は三十名近くいた会員も年の経過と共に段々と減り、死亡、退会などもあり今の処約半数の十六名となり随分と淋しくなりました。止むを得ぬかとも思われますが、まだ若いのに病で亡くなられるのは、何んとも心惜しいことです。

約四十年間会員の交わりは将しく一つの文化を形造っていると言うことが出来ると思います。現在まだ第一線で活躍されている方もたくさんおられますが、最近では経費の面や、会員がやゝ老境に近いことなどから行動力も少し鈍り勝ちになっています。昔のように一流の文化人や評論家の方々を招いての講演会の実施などいささか文化活動に寄与出来たこともありましたが　今では到底出来難い状態になりました。会員一同昔を偲んで、そのもどかしさをいつも痛切に感じています。

月一回の例会に講師も迎え各方面の話を聞いたり、会員相互の親睦と、自己啓発に努めているのが現況です。会員が少なくなることは会の行事や運営にも支障が出て来ます。このことについては十数年も前から色々と意見が出され会員の増加について考えて来ました。いよいよ会員の意見も真剣に論じられ、その方向について纏まりました。我々と余り年令的にも差のない方で、新潮会の今までの在り方に賛同いたゞける方をお迎えしたいと思っています。

今の時代生涯学習の必要なことは皆充分承知しておられ老人大学での趣味を通じての勉学やいろんな話を聞ける機会が多くなったり、又幸い文化会館が出来「生」の演劇や音楽など手近に目にし耳にするなどが出来るようになりましたことは私達大へん幸せと言わねばなりません。新しく会員としてお迎え出来る方々と共に手を取り合いながら地域のためいさゝかでもお手伝いが出来ればと念願しています。

まぼろしのホタル　ヒメボタル

植物同好会　河本雅視

昭和五十一年の夏、私は理科クラブの生徒を連れて、船越山の気温分布の調査に行ったことがある。るり寺の山門にある部屋に泊めていただき、夜、生徒と一緒に近辺の参道を巡っていると、スーッと光が飛んだ。ホタルだと思ったが見馴れた光ではない。光の方へ近づくと草むらに別の光を見つけた。生徒と、ここにも、そこにもと五つ六つの光を見つけた。なんと、それらの光は黄金色であり、しかもその点滅がまたすばらしい。五匹を一ヵ所に集めると黄金の光がチカチカと点滅する。点滅が早く暗闇でのその金色の小さい、しかし強い光の点滅はすばらしく、しばしその光景に見とれる。手に取って見るとやはりホタルであるが、これはゲンジボタルでも、ヘイケボタルでもない。このあたりでは見かけないヒメボタルである。私は自分の目を疑った。

ヒメボタルは伊吹山や筑波山の五百米から一千米ぐらいの高い山に住むホタルであり、この地方にヒメボタルがいるということは聞いていなかった。だが現にここにいる事は不思議である。私はこの事を次のように考える。船越山には山腹に冷風を吹き出す穴があり、そこから絶えず冷風が吹き出し附近の気温が低く、真夏でもいつもひんやりとしている。しかも森林に囲まれた別世界である。ヒメボタルが生息しても不思議はないと解釈したがどうであろう。

ところでホタルといえば誰もよく知っているゲンジボタルとヘイケボタルであるが、これらと比較してみるとこの両者は幼虫時代は水の中で生息し、カワニナやタニシなどをエサとするが、このヒメボタルは陸に住み、カタツムリなど陸の巻貝を食べて生育する。また、体の大きさもゲンジボタルは一、五糎前後、ヘイケボタルは一糎前後であるが、このヒメボタルはなお小さく五粍ほどで非常に小さい。しかし、光は体の割に強く、金色の光を出す。点滅も早く、ゲンジボタルの二秒間に一回ほどに対し、ヒメボタルは、一秒間に二～三回発光しイルミネーションのようである。

このホタル、この地方の宝として保護したいものであるが、最近見られなくなったようで残念で仕方がない。まぼろしのホタルであったのか、もう一度見たいものである。

磐座（いわくら）

山崎郷土研究会
久保寅夫

古代、神を祭るために神霊の宿ると考えられた石の標識である。自然石のままでも磐座と呼んだが、特定の場所に置いたり、立てたりしたものも磐座とした。石は加工されないのが普通で、形は不特定、一個の巨石の場合もあるが、数個の石を放射状に組み合わせたり、積み重ねられたものもみられる。旧蔦沢村には、岩上神社（山崎町上ノ）と巌石神社（山崎町下町）とに自然石のまゝの磐座がある。岩上神社の磐座は高さ約四メートル余り、正面の横幅は約七メートルである。裏の渓からみると高さは六メートル位はある。この磐座の特色は谷川のほとりにあることである。岩上神社が細い谷川のほとりにあるのは谷奥の水源にあって、祀りのためには最も尊厳な形を具えていたわけである。

下町にある通称権現さんが、磐座であることは余り知られていない。石段を登って、正面の社の背後にそそり立つ偉大な岩、およそ十メートル。横幅は社より少し広く、縦に二、三の割れ目が見える。立岩としては五～六メートルの磐座は多いが、十メートルに及ぶものは少ない。その少ない例の中に入るのが権現さんである。権現さんと呼ばれるのは、修験道が開かれ、神佛習合になってからのことであるから、古くみて千二百年前、磐座の信仰はそれからさらに千年前にはじまるから二千二百年前に祀つられたものと、考えられる。岩の偉容は余り変わっていない。磐座の起源は古墳時代より以前、水田稲作を始めた弥生時代の信仰と祀りの場であると考えられる。この時代の水田は、現在の平野にあったのでなく、山地の端や、細長い谷、低い山と山に挟まれた谷間にあったと云われている。水田耕作をして生活していた人々が磐座として信仰した。今日なお同じ場所で、下町の人々が日参してお供えを捧げられているのである。この磐座の前を流れる伊沢川を隔てて、覆土が流失して巨石の表われた古墳がある。山崎東中学校のある官弦寺山からも、古墳群が見出されたことなどを思うとき、この辺に興味深いものがある。

「やまさき文化」発刊十周年記念に際して

邦楽邦舞小唄研究会
福山清一

「やまさき文化」発刊十周年記念号に投稿するように荒木編集委員長からのお便りをいただき平素から文集等に投稿する知識もないものが、の思いもあったが、永年お世話をかけている文化連盟であり、連盟発足三年目からおよばずながら事務局長の大役をお受けした義務もあり発刊当時の思い出をとペンをとりました。

事務局長をお受けした時点から「機関誌」の発刊をの構想をズット持ち続けていましたが、まず連盟の内部の充実を第一と考え、当時文連事務担当の教委伊藤氏の示唆と協力で、郷土芸能保存会の設立・音楽祭・古典を主とした秋の芸能祭の創立に努力したが相当の時間を要し心ならずも時期を逸していたのである。

お陰で郷土芸能保存会・音楽祭・芸能祭は文連の例年行事として現在のように定着していることは誠に嬉しい事である。

機関誌の発刊については出版物の発刊という事に全く経験がなかったのであるが創立五年目にして教委伊藤氏に諮り故根岸元彦文学会々長を編集委員長にお願いし現在の編集委員の皆さんと記事内容、原稿の依頼、経費の捻出方法等再三再四の委員会を開催し検討に検討を重ねた結果一九八二年二月小冊子ながら「やまさき文化」創刊号を発刊したのである。その時の大きな喜びは今も忘れ得ない感激であった。

題字は尾崎正一氏、表紙・カットは山崎美術協会の方々に輪番制にてお願いし現在に及んでおります。

改めて創刊号を読んでみると、当時僅か十九頁のものが現在では三十頁を越さんとする増補ぶりに新しい感動を覚えると共に編集に携わられる関係の皆様のご労苦に対して深く感謝をいたしております。

文連発足以来十五年、歳月の流れの速さと人の命の儚さをつくづくと感じます。当時の役職の方で前会長庄静夫氏外五名、短歌・俳句等で氏名のわかる方々が十五、六名ほか所属団体員の方を含めると相当数の方が幽冥境を異にされており改めて哀悼の意を捧げます。

私の所属団体も段々と会員が老令化して行き大きな悩みとなっており他の団体も同様の状態でないかと案じております。各団体の役職の方々も山崎文化連盟が益々発展するよう新会員の発掘を心にかけていただき、この人達によって新らしい空気を吹き込んでもらい、現代の若人にも興味のもてる連盟に脱皮するよう特別の努力をお互いにして行きたいものと念じております。

過った自然保護論

山崎詩舞道連盟
小川　登

自然は放置すれば何時までも良好な状態を保つものであるとの誤った観念に捉われている人が多い。最近では都会の自然保護団体などに、このような無責任な感傷論をなす人が多いのである。本当に緑を守っている林業の実務者の立場からすると全くナンセンスである。

北海道を旅行すると何百町歩の根曲竹や熊笹が一斉に枯れているのを見ることが出来る。竹は草木であるから二十年位で花が咲き実がなると一斉に枯れてしまうのである。吾々の周辺の竹林は永久に緑を保って枯れることが無い。これは吾々の先人が古い竹から順次切り出して、新しい竹を育てるようにしたからである。最近、竹の需要が無くなったので二十年以上も放っておく場合が多い。こうした竹林はやはり自然の法則に従って枯れてしまっている。其の後には細い篠の竹のようなものが生えている。これが自然の節理である。昔は赤松亡國論と言う言葉があった。赤松の根には嫌気菌が繁殖していて水をハジク作用をする。其の為赤松林には保水能力が無く、林地を痩悪化してしまうと言うのである。最近は松喰虫の被害で赤松林が枯死して、その後に広葉樹の雑木が生い茂っている。其の雑木の下には赤松の稚苗がびっしりと生えているのである。何れは赤松と雑木の混淆林が育つことゝ思うが、国土保全、水源涵養の立場からすれば効率の高い森林が造成されたことになる。

この二つの例から致しましても自然は破壊と建設を常に繰り返すものであることがお判り頂けると思います。

杉や桧の植林の場合も同様で、木を植えたまま放置すれば過密林分となり、表面上はうっそうたる森林であっても、林内に陽光が当らない為、地表植物が枯死してしまいます。これでは森のもつ治山治水の効果が発揮出来ないばかりか、逆に林地崩壊の原因となります。昭和五十一年の一宮町福知の山崩れは三、四十年生のうっそうたる過密林分で起きたのです。林業行政の立場から除間伐が喧しく言われるのはこの為です。

自然を最良の状況におく為には何れの場合にも人工を加えなければなりません。宍粟の山林の七～八〇％は過密化した危険な林分です。宍粟森林王国で第一に手がけなければならないのは、徹底した除間伐により森林の過密化を解消することです。

サツキ雑感

播磨さつき会
長田一三

サツキは、わが国固有の植物で、花好きの先人たちによって愛好され、育てられた世界に誇れる園芸花卉の一つです。

つつじの中では、一番遅咲きにはいりますが、常緑で矮性のため、古くから庭木として、露地植えにされたり、盆栽として鉢植えにされて、多くの人々に親しまれてきました。特に盆栽として、その花の美しさ、木の育てやすさ、盆栽仕立ての容易さ等が相まって、四〇〇年以上にも及ぶ長い年月の間、いつの時代においても大衆的、庶民的な花木盆栽として人々に愛されています。

戦後は新品種が次々と登録され、又経済発展に伴って、余暇を楽しむ人々が、サツキブームをつくりあげていきました。特に日本皐月会の農林水産大臣賞の受賞品種は、サツキの品種に対する人気の動向を示すようになりました。愛好者が新花の苗を購入するにも実際に花をみて、多くの人たちに支持を受けた受賞品種を購入するように変わっていきました。

最近は全国各地で愛好会が誕生し、その地域に密着した活動を展開しております。余暇を利用した趣味のグループであったり、盆栽として技術を追求していくグループ等であります。

山崎においても盆栽づくりを更に進め、さつき祭には、近隣諸国より愛好者等を迎えるような方策を望むものです。

また、一方つつじの名所づくりを目指して最上山公園には、かなり植栽されました。しかし、その後の管理状況等で今だ成果をあげるには至っておりません。島根の三隅町とか、佐賀の祐徳稲荷大社のように、山一面に咲き乱れる、つつじの大群は華麗な模様を織り出した錦のように、すばらしい景観を呈しています。

最上山が将来、名所として定着できるよう、更に植栽と管理を、次代へも、しっかり引き継いでいかねばならないと、痛感いたしております。

音楽の効用

山崎合唱連盟
藤井七代

十一月二十五日、西播磨文化会館主催のふるさとの心をうたう西播磨音楽祭が盛大に開かれました。西播各地より、十七の合唱グループが参加し日頃の練習成果を披露、お互いに研鑽の場とするのです。内容は例年より一段とグレードアップされた事を強く感じさせられました。さて、掉尾を飾る宝塚市交響楽団の素晴らしい演奏となりました。一曲が終わり二曲目はモーツァルトの交響曲四十番軽妙な指揮者の背を見つめつつ、美しい響きに聴き入っておりました。ふと四辺を見回すと聴衆は、すやすやと居眠っている様に私は見えました。その時は美しい演奏に陶酔されているのだろうと軽く考えておりました。ところが、それには訳のあるらしい事を知りました。というのは、『音楽療法入門』（芸術現代社刊）という書物によれば……

音楽は精神を浄化する作用があり、ひいては身体に良い。ということが科学的に証明されている。ねずみの実験によれば、モーツァルトの曲と、他の現代曲をねずみに聞かせた場合、前者の方がより良い効果をあげている。モーツァルトの音楽はメロディーラインが非常に滑らかで軽快なリズムを持っている。それは生物のリズムに全く合致する。生物と音楽はその構造が似ているといってもよい。生物にはリズムがある。心臓の鼓動、呼吸、起きて、食事し、働く、寝る、という一日のリズムなど様々なリズムの中で生きている。音楽も十六分音符・八分音符・四分音符・一小節・一楽章等々の多様なリズムが同居し、全体の調和がとれている。だから調和のとれた良い音楽を聴くと、音楽のリズムに人間の身体が同調し、その結果呼吸を通して自律神経がコントロールされ身体が正常化される。音楽療法とは、この同調原理を科学的に活用して、身体の一番良い状態にもっていく療法なのである。云々……。

モーツァルトの交響曲を聴きながら、漂う雲のような心地よい一刻を過せたのも「諾なるかな」でありましょうか。

音楽好きな人達にとっては、嬉しいおはなしではありませんか。

そういえば、娘達が妊娠中に胎教と称してモーツァルトの曲や、ヴィヴァルディの「四季」のCDに聴き入っていたのを思い出しました。

随処に主となる

山崎茶道研修会
柴山宗玉

今から四年前、昭和六十二年七月の末、夏の盛りに、私が、本山の先生と二人、讃仏歌の講師として、岡山の曹源寺様へ行きました時のことでございます。

曹源寺様は、岡山池田家の菩提寺で、御住職の老師様と、修業中の雲水さんが五、六人いらっしゃいました。

朝六時、本堂に集合してお勤め後、三十分間の坐禅をしました。禅宗の寺では当然のことですが、参詣者共、百人近い人が坐っているのに、余りの静けさに、坐禅半ばでしたが、じっと老師様のお姿を拝見しました。墨染めの衣をお召しの老師様は、まるで岩のように、微動だもない、静かで厳しいお姿で坐っていらっしゃいました。揺れ動く心と体を、無言の鞭で強く打たれた思いでございました。

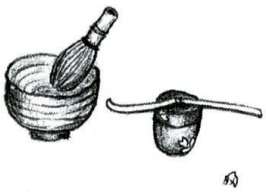
やがて朝食の時、老師様は、襷をかけて、お給仕して下さいました。一汁一菜の清らかなお食事は、山海の珍味にも勝るおいしさでございました。

午後のひととき、僅かな休憩の時間に、老師様は、お抹茶を点てて、運んで下さいました。美しく点ったお茶も、お茶碗も冷たく冷やしてあり、それに、よく冷えた各々の菓子皿に、みどりのもみじ葉を濡らして敷き、それに盛って下さいました一切れの冷えた羊羹の味、それは、心に滲みる程においしく、私はこの世で、これ以上の客のもてなしが、他に出来るだろうかと思って、押し頂きました。

「随処作主」。これは禅のおしえの言葉でありますが、まさにその侭、その場その場で主となって、何をなさっても非の打ち所のない、さすがに御修行の出来た老師様の無言の教訓に、深い感動を覚えました。

私達は、教えに行って教えられ、暑さも忘れて、清々しい気持ちで帰ってまいりました。

茶道に於きましても、日頃の生活の中でも、私達は、言葉だけではなく、身の行いとして、随処に主となって行けるようにと、念願するものでございます。



思い出

山崎謡曲同好会
葭谷　驍

能楽、茶の湯――室町文化に源を発した日本固有の幽玄を主とするこれらの芸術の鑑賞は、来訪する外国文化人に例外なしに深い感銘を与えているようである。しかし、それらを学ぼうとすれば、奥が深く、数多くの書物も出ているが、あまりにも専門的なものが多く、難解、かつ煩雑に過ぎ、初心の人々の理解を妨げ、興味を失わせ、結果はむつかしく面白くないものだという感じを与えてしまうように思われる。謡曲は他の日本芸能と違って、音程的に合わせる楽器がないように思えるので、自由な音域を使って謡うことが出来る。音程に自信のない人にもあまり影響がないと思う。そして自分一人で謡え、楽しめる、ということが謡曲の大きな特徴だと思う。

私は、昭和二十八年に、さそわれて謡の稽古を始めた。心得のある者は先生を除いて全員が全くの初心者、先生も教えるのに大変ご苦労があったようだ。

かれこれ五年程稽古を続けた、ある日、姫路からこの道の名人といわれた、九世、江崎欽次朗師匠が、山崎の諸先輩の稽古場に来られていたが、その場に先生とご一緒出来る機会を得た。私が謡の手ほどきを受けた先生も仲々の上手であったが、九世師匠の謡を聞きこんなに人の心を魅了する技があるのかと謡の魅力にとりつかれた。そのうち先生の勧めで、九世師匠に直弟入門を許された。続いて十世師匠にも学ばせて頂き謡が唯一の楽しみのものとなった。また両師匠に大阪の大槻能楽堂、産経会館などにお連れ頂き能楽を楽しませて頂いた。その時には必らず楽屋に連れて行かれた。能楽堂の楽屋は鏡の間を最も神聖な場所とされ「装束の間」「シテ方控えの間」「ワキ方」「囃子方」「狂言方」の楽屋が順に並び、礼儀はきわめてやかましく、お互いに相手の技芸を尊重し、言葉づかいも慎重に、楽屋の気分というものは非常に気持ちのいいものだった。その頃、山崎では謡会がさかんで、友澤庄二先生（医師）宅の清風荘で大先輩の末席に加えて頂き「春夏秋冬」よく遊ばせてもらったものである。その大勢も今は世を去られ、ありし日の思い出は、ひとしお感慨深い限りである。二十年程稽古を止めていたが、再び稽古を始め、謡曲の難しさを改めて知った。休まず稽古を続けていたらもう少し上達したのではないかと悔いている昨今である。

心を忘れずに

山崎茶華道協会
藤井久子

山崎茶華道協会は、年三回の茶会と一回の花展を年中行事にしていますが、それらを通じて会員が益々交流を深め、親睦を密にしながらみんなで助け合い協力し合って和気藹藹のうちに進めています。

茶華をたしなむ者としていつも思う事は、お茶やお花の技術のみを習得するだけでなく、人間としての心を養うことが何よりも大切な事だと思います。利休も芸事は心が欠けている様では真に上手だとは言えないと言っています。

いつか、庄会長さんから松平定信の茶道訓についてお話を承った事がありますが、その中で、お茶は人にさからわず隅々にまで心を尽くしてもてなし、客に対して喜んで頂ける様に誠心誠意尽す事である。しかも、お茶をたてる時だけでなく、普段の人間関係の中で、他人を悪く言ったりせず、われこそはと言わんばかりに自分の智や芸を誇ったりせず、他人にさからわず、かけた茶碗、われた茶入れも大切に用いれば平常の事でも奢りがましい事はいささかかもしないし、老者を敬い幼い者をいつくしみ、人にへりくだった生活ができるのだといった事を聞いて平常の生活こそが大切であると思いました。

お花と同じで私が女学校の時谷川先生のお父様から、お花を覚える事は花の活け方よりも心の修養をする事だ、心をつくる事だ、自分の日常のあり方を絶えず考えなさいと茶花を通していろんな面で心の指導をして頂いた事を覚えています。

しかし、ややもすると、私達の生活の中では他人を悪く言って足をひっぱったり、一寸した事に腹を立てたり、他人が高く評価してくれてこそ値打ちがあるのに自分で自分を過大評価して高ぶったり、相手の気持ちになって考える事ができなかったり、一寸した事に流儀だてして他流を批難したり、口先ばかり上手を言ったり、高価な道具でさえあればよいと考えたり、茶道訓と相反する事があるのではないでしょうか。大変みにくく恥ずかしい気持がいたします。

茶華を愛好する者として細やかな温かい心づかいを持ち、万事につつしみ深く、謙虚で素直な美しい心で、誰からも尊敬され、信頼される豊かな人柄であるよう、毎日、毎日の生活を大切にして行きたいと思います。一日一日を空にせずに有効に使えば、即ち、自己の財産を積む事になるのだと思います。

美術展から

山崎美術協会
田中　武

今年度の町美術展の審査会で、洋画の部を担当して下さった松本宏先生が、あとの講評のなかで「出品点数は少なかったが、それぞれ、個性的な表現がなされており、描写の方法にも各自が異なる自分の方向を見つけようとする努力のあとがうかがえる」また「いま一歩、追求する精神の持続のほしい作品もあったように思います」と、おっしゃって「制作は自己葛藤と表現努力の連続であります。その点やや、淡泊な感じを受けました。あくまで自分に正直に、もっと貪欲に肉迫して下さい。努力は必ずや自分自身の更に大きな満足と喜びになってかえって来るでしょう」と結ばれました。

後日洋画部の者が数人集ったおりに、この評を受けて話がはずみました。〝追求する精神〟〝自分に正直〟〝自己葛藤〟〝貪欲な肉迫〟等が作品制作過程の中で具現化するにはどんなことがあるだろうと言うなげかけにFさん答えて「行き詰った時には納得のいくところまで立ち帰ってみることだ」と。一枚の絵をもとから描き直すぐらいの決断がほしいと言うことです。いくらかでも時間と労力をかけて描いたものには、少々意にそぐわなくても妙に愛着が出来て捨て難く、程々にまとめて仕上げてしまう様なことになり易くてその実行は容易ではないものです。然しこれが安易な妥協であって本当の意味の自分に正直でないことである。純粋さを真情とする芸術において、厳しくまもらなければならない制作姿勢であろう。

かつて山崎へも指導に来られたことのある土肥先生がやはり「絵を消す勇気を持ちなさい」と言っておられました。「せっかく描いたものを消すのはたしかにしんどいことではあるが、決してマイナスにはならない。消された色が絵に微妙に影響して思わぬ効果を得るものだ」と。我々が実行して必ずしも、うまくいくとはかぎらず、その絵が一枚だめになったとしても、永い目でみればきっと、自分の身についてプラスになるだろう。

話は、とゞまる所を知らず続いて、深みゆく文化の秋にふさわしい夕でした。

なによりも舞踊が好き

むらさき会
杉谷茂子

むらさき会は「なによりも舞踊が好き」という女性の小さなグループです。平成元年秋、同好のものが寄りより話し合い「舞踊を通じて親睦を図りながら健康増進にも努めよう…」と、この会を結成しました。

師匠は岡山県津山市在住の正派若柳流、若柳吉紫恵先生。会の名称も師匠の〝紫〟の一字をいただいて付けました。現在の会員は九人。年齢は二十六歳から七十歳まで。職業もさまざまです。毎月一回、拙宅に師匠を迎えて練習会を開いているほか適時、手すきの会員が集まって「おさらい会」をしています。

練習会は毎月一回だけなので、この日ばかりは、みんな大張り切り。午前十一時ごろから昼食をはさんで午後三時半ごろまで、日ごろの苦労も、なにもかも忘れて舞踊に打ち込む懸命の練習ぶり。休憩のとき身ぶり、手ぶりなど舞踊のことや世間話に花を咲かせるのも楽しみの一つです。

会が発足してまもない十一月、山崎まつりの催しの一環として山崎文化会館大ホールで芸能大会が開かれました。当局からのお誘いもあって先輩の各芸能グループの仲間入りをさせていただき、会としては初めて町の人たちを前に舞踊を披露いたしました。これがボランティアとしての社会参加のスタートでした。その後、敬老会演芸慰問や町の行事など事情が許す限り努めて参加するよう心掛けています。

平成二年五月、山崎文化連盟に加入させていただきました。「発足後一年足らずの未熟な私たちの会が、伝統の連盟に加えていただくのは、あつかましいのではないか…」との声もありましたが「これを機会に、みんなが力を合わせ、より一層、技量を磨けば、恥をかくようなこともあるまい」と、加入申請書を提出したようなわけです。

いままでに練習してきたのは「みだれ髪」「祝い酒」「雪椿」「男の情話」など演歌に合わせての舞踊がほとんど。これからは古典舞踊のお稽古もしたいとの話も出ています。文化連盟と文化会館主催の春の芸能祭には初参加させていただくことになると思いますが、そのときは精いっぱい練習の成果を披露したいと考えています。同好のみなさん、私たちの会に入会、一緒に舞踊を楽しみましょう。

民踊と健康管理

さつき民踊グループ
吉田芳子

私　宍粟民踊同好会に加入させて頂き早十余年一宮の大谷政子先生の優しく且つ厳しいご指導を受け、何とか格好のつく踊りを身につける事が出来ましたのも先生はじめグループの皆様のお陰と感謝しております。

昨年は文化会館の大舞台で発表を行わせて頂き観衆の皆様の暖かい拍手を頂戴し感激ひとしおでした。広い舞台、加えて、照明、音響装置のすばらしい事など、踊り終わって控室に帰って来ても胸の鼓動が止まらなかった事を今でも鮮烈に覚えております。

一流のタレント歌手などが踏む舞台で、つたない芸しか持ち合わせていない私等が、その同じ舞台で芸を披露させて頂いた、無上の光栄を忘れる事なく、今後も精心に励みボランティア活動の一環として、頑張っていきたいと思っております。

芸事はどんな芸にもかかわらず、必ずお稽古がつきものであり、その一つ一つの積み重ねが実を結び花を咲かせる事になり、平素の練習が如何に大切であるかは私身をもって体験しているところですが、踊りは特に心技体がリズムに乗らないと充分な成果は得られず、毎日気持ちをゆったり持ち、特に足腰の健康には人並み以上に配慮して、積極的に山歩きなどの運動に参加し、踊りの基本となる足腰の強化に力を入れております。中腰の姿勢からすーっと立つ振付けの多い踊りをスムーズにこなすためには、この様な運動を意識的に行い歳をとっても、足腰には自信のある体づくりを目指して頑張っております。

心技体、この言葉はお相撲さんの角界でよく使われますが、どうしてどうして私等にも、立派に通用実践すべき言葉であり、心にゆとりを、技に磨きを、体に活を入れて、取組んでみたいと思っております。

将棋文化と世界の中の日本

山崎将棋同好会
杉元正輝

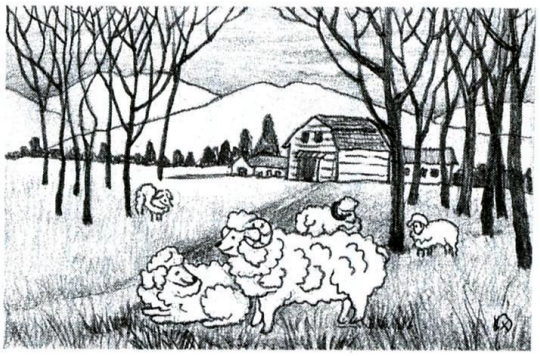
昨今の日本人を震撼させたニュースの筆頭はイラクのクウェート侵攻によりイラクに貢献した日本人の人質問題でしょう。人質になられた企業戦士の皆様、ほんとうにご苦労さまでした。

平和の孤島日本が、実はかつてのNHKの人気番組「ひょっこりひょうたん島」のように世界の中に漂う島であることに日本国内が大揺れに揺れるとともに、平和の有難さを感じたものです。今後、「平和」の貴重さを感じ、日本の進路をみんなで見定めたいと思います。

将棋の世界のビッグニュースは弱冠二十九歳で木村十四世名人から名人位を奪取し、四十八歳で中原誠現名人に敗れた後も、タイトルを取り、棋界最年長六十五歳の現役プロA級（ベスト10）の地位にある、かの皆様ご存知の大山康晴十五世名人の文化功労章受賞です。もう一つの大きな話題は、弱冠十九歳の若き竜王「羽生善治」と、棋王、王位の二十九歳「谷川浩司」前名人の竜王戦が、かのグレート・ドイツの「フランクフルト」で開催され、結果新竜王に「谷川浩司」がなったことです。

山崎町の文化のビッグ1は「ソ連のカエデ」がやってきたことを契機に国際交流の輪が広がるかということでしょうか。

最後に、山崎将棋同好会の夢は、現在さつき祭協賛将棋大会に姫路・西脇をはじめ県下遠方から多数参加いただいていることを足掛りに、今後、団体戦などを開催して、神戸市、高砂市に次ぐ、県下随一の将棋の町とすることです。



歴史ある碁

山崎囲碁同好会
森本一二

歴史ある碁

「私は父親（橋本国三郎氏）に連れられた小さい頃から、幾度となく山崎に招かれ、前野四郎さんをはじめ、今は亡くなられた方たちを含め、たくさんの人によくしてもらいました。だからこちらの様子は誰よりもよく知っています。

皆さん碁が強いです。碁が好きです。層が広くて深いです。

これは碁の歴史が古いからです。私たち（関西棋院）の支部がありますが、その活動の盛んな様は他に例を見ない程です……。」

これは平成二年霜月十八日、関西棋院宍粟支部長、高野圭介氏が同棋院から受けられた、普及功労賞の受賞祝賀パーティーにおける、橋本昌二九段の祝詞の一節です。

私は、「関西棋院云々」が少し気になりますが、宍粟に最も深く、長くなじみのある棋士として観ておられると、素直に受け入れることが出来ました。

囲碁活動

宍粟の碁は山崎の先覚者を中心に古くから広く行きわたり、各地に先達と好事者を輩出しました。

その様子は「宍粟の碁」として刊行され、全国の同好の士にも広がっています。是非再読してほしいものです。

また近年、「宍粟囲碁新聞」を季刊しています。これは時の流れと各町の活動を細かく伝えるようにしていますので、よく見て下さると共に原稿、応募などにご協力をお願いします。

碁会は好きな者がもより、もよりで集ってすればよいのですが、誰でも自由に参加出来る地域の大会は各町の囲碁同好会で主催しています。

山崎町における「さつき囲碁大会」、「菊花囲碁大会」。千種町の「念佛囲碁大会」、波賀町の「町民文化の集い」、一宮町の「ふるさと祭」、安富町の「あじさいまつり」に囲碁大会がもたれています。

全郡の同好会の主催には、故前野四郎氏の功績を偲び、御遺族の寄贈による、「前野杯争奪囲碁大会」を個人戦、団体戦に分け、山崎町で春秋二回持っています。

この会の個人戦には郡内だけでなく、佐用や竜野方面の参加もあり、規模、人数共に最大の会であります。

碁会に参加を

ところでこれらの碁会をもって感じることは、毎会の参加者が固定化し、有段者の一部にかたよって、広く全郡の同好者の集いとはなっていないことです。

このために本年より関西棋院宍粟支部と連携して、段をお持ちでない方の部をつくり、優勝者には初段位を無料で贈ることにしました。「宍粟囲碁新聞」でお知らせしました通り、既に段位を受けられた方が出ています。

級位の方々が日頃の腕を試すため、楽しんでたくさん出場して下さることが、地域囲碁の振興であり、現時点での課題であると思っていますので、誘い合って段位、級位にかかわりなく、気楽に参加してほしいものです。

生きがいの碁

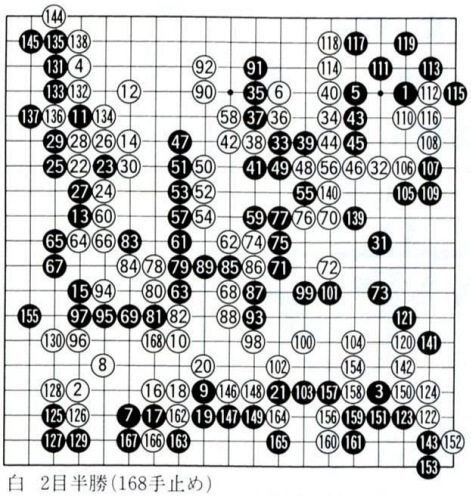
近年、若い人たちの中にすばらしい棋力の方々が何人か出て誇らしく思うのですが、百才、尚能く棋戦を生きがいとされた、故大井万兵衛さんのすばらしさに感銘しているのは私だけでありましょうか。

「碁打ちはボケない」ともいわれています。若い人たちが体のスポーツを愛好されるのは当然ですが、長い人生の友として頭のスポーツ「碁」に親しむ人が、年令や男女の壁を無くして一層多くなり山崎・宍粟の碁が盛んになることを願ってやみません。

お好み対局

平成２年12月９日　　於：さつき荘

互先　尾崎正一
先番　永峰一寿（先番５目半コミ出し）



白　2目半勝（168手止め）

編集後記

編集長　荒木俊介

今回、「やまさき文化」第十号発刊を記念して、一般の方々からエッセー、コントなどを募集したところ、屋敷豊子さんのソナタ「雪」と、藤原誠氏の「にじみ合う心」の二編の入選作品を得ました。屋敷豊子さんは、神戸新聞募集の短編小説にも入選された実力もあり、このエッセーも幼い日の故郷の雪の思い出をもとに、美しい雪の詩の世界が、散文調に描かれた優れた作品です。

又、藤原誠氏の「にじみ合う心」も氏の病床に於ける体験をもとに、心の苦悩と互いのもつ人間愛といったものが、実際に経験したことのある者でないと得られない真実のもつ力強さで書かれた心うつ作品です。

以上のように、さゝやかな記念事業ではありましたが、小さな実績の積み重ねが、やがて、地域社会の文化を築いて行くことになるものと信じて、今後も益々、頑張って行きたいと思います。

コラム欄には、灘神戸生活協同組合の前副組合長で、現在も故郷山崎町で同名誉理事として活躍されている長川太郎氏とNTT山崎営業所長岡本亘弘氏のお二人の玉稿を寄せていただきました。紙上を借りて、厚く御礼申し上げます。

山崎町文化連盟役員及び団体名

会長　壺阪　壽
副会長　福山清一　藤井慧乗
理事　荒木俊介　本條　衞
福岡久蔵　山崎美術協会
志水正信　山崎郷土芸能保存会
伊野操治　山崎謡曲同好会
秦　耕三　山崎邦楽邦舞研究会
谷川道一　山崎茶華道協会
杉元栄男　山崎詩舞道連盟
藤井七代　山崎合唱連盟
稲村幸子　山崎歌人協会
福田栄三郎　山崎俳句協会
柳田　弘　山崎郷土研究会
松本　明　山崎囲碁同好会
三宅宏佳　山崎将棋同好会
高野保雄　新潮会
山国喜丈　昭和会
田内竹男　播磨さつき会
朱山　毅　山崎茶道研究会
井口武一　植物同好会
大谷つるゑ　さつき民踊グループ
安井道夫　山崎文学会
塚田英夫　粟の実会
和田秀男　杉元清美
三浦昭平　昭和会
垣口正信　植物同好会
長川耕一　藤村清一
大谷司郎　坂根雅彦

顧問
監事
事務局

編集委員会
編集長　荒木俊介
委員　浅田耕三　安井道夫
和田秀男　藤村省三
北川泰子　藤村清一
長川耕一

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器
イトーオフィスサービス株式会社
（旧社名　伊藤文具）
代表取締役　伊藤　勉
山崎町中央商店街　TEL(0790)62−0126

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司あらき
本店：播州山崎町さつき通り　(電)62−0170
山田店：播州山崎町山田　(電)62−0160

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO., LTD.
for happy day happy life

飛石機械 dept. (0790) 62-1700
トビイシ住設 dept. (0790) 62-3610
CREATIVE dept.
飛石レンタリース山崎 (0790) 62-1703
飛石レンタリース姫路 (079) 63-4022
飛石レンタリース姫路 (0792) 32-5411

✦最新型カラー現像機導入✦

カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop

コエカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

山交タクシー

山崎神姫バス西隣
電話 0790－62－2166(代表)

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (0790) 62-0052

＊安全で快適な生活をお届けする＊

共同石油株式会社特約店

株式會社 本條商店

社長 本條 衛

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790)62－4321(代)

清酒 山陽盃

ふるさとのお酒 確かな品質

サンヨウハイ

本醸造 しぼりたて 龍神

純米酒 きつき 一献

山陽盃酒造 TEL (0790) 62－1010(代)

登録商標 老松 スエヒロ オイマツ

しぼりたて 原酒

キリンビール 特約店

本醸造

兵庫県山崎町 老松酒造有限会社

地元にひろがる
心のふれあい ―― にしん

西兵庫信用金庫

理事長 菅原 柾夫